

進化

Monthly Shinka / 2001.11 / November

◇

今、求められる三つの布施
——自己と社会の救済のために

◇

蓮華は、仏教の花として古く
尊ばれてきた。泥水の中にお
清楚に咲くその姿は純粋な
心を表わし、仏陀や菩薩の
もなっている。

2001
Shinka
MONTHLY

VOL.14





質問者一人ひとりを暖かい波動で受け入れる

マイトレーヤ元正大師説法会

八月中旬から九月初旬にかけて、関西・関東の各道場で大きな反響を呼んだ「マイトレーヤ元正大師説法会」——。その後も、九月中に船橋・大阪・名古屋・横浜・東京の五カ所、および十月十四日にも東京で大々的に行なわれ、どの会場も大勢の参加者で埋め尽くされました。



皆の修行に役立つ法則をわかりやすく説かれる



修法された数珠や法具で、修行を頑張った人を称える

詳しくは「LOOK BACK ALEPH」本文108ページ～参照





道場活動に新風吹き込む――

慈愛・神通・法の体現者、
あのチッタカ正悟師が東の道場担当に

（詳しくは「特集1」本文22ページ～参照）

写真◆東京道場に常駐することになったチッタカ正悟師

進化

Monthly Shinka / 2001.11 / November



2001
Shinka
MONTHLY

vol. 14

進化

CONTENTS

MONTHLY SHINKA 2001.11 November VOL.14







マイトレーヤ元正大師説法

Lecture

今、求められる三つの布施——自己と社会の救済のために

（二〇〇一年十月二十七日・名古屋道場）

三つの布施——財施・安心施・真理施

今日は、六つの極限の修行について、前から説かれていた法則ですが、この時期に合わせてお話ししたいと思います。

六つの極限の修行の最初、これはお布施の実践ですね。これは貪らずに施すことということになります。そしてこのお布施には三つあると。一つ目は財施、二つ目が安心施、そして三つ目が真理施、ないし法施と。

大金持ちで、かつ貪りの強い国――日本

まず財施に関して言うと、これは日本人はだいたい宗教団体とかお布施とか聞くと、アレルギー反応を起こします。しかし、わたしは、修行者の視点から見れば、これはまさに日本人のエゴ、物欲を背景にしているのではないかと考えています。

日本人というのは世界一金持ちの国民です。一方、途上国には非常に貧しい人たちがいます。この教団は、オウム真理教の時代から、チベットの難民援助、ラオスの仏教修行者や貧しい人たちの援助、ザイールでの食糧・医療援助、ブータン政府への援助、スリランカの政府機関への援助や現地での雇用創出の事業、ロシアでの医療等の援助など、教団としても施しの実践をやってきました。これは、仏教文化の保護の意味もあるし、一般に貧しい人たちの援助の双方の意味がありました。

ところで、世界の中で見ると、日本人というのは大変な金持ちなんですね。「アメリカの方が金持ちじゃないか」と言うかもしれませんが、それは総人口が多いからで、一人当たりの国民の所得ということに関して言えば、日本が、主要七カ国において一番です。

日本人とアメリカ人を比較すると、アメリカは貧富の差が激しいこともあって、下の六〇パーセント、つまりだいたい一億五千万人くらいですが、それは日本の貧困層と同じ生活水



準です。

このように、日本ほど平均的に大金持ちの国はないと。東南アジアの人たちは、日本人の普通の人の生活は、彼らから見て王侯貴族の生活だといいます。

しかしここで、不思議だけど、必ずある現象が起こっています。それは、その生活水準に慣れてしまい、自分の周囲も皆同じような状況にいると、その水準以下では生きていけなくなるということです。そして、自分たちの狭い人間関係、狭い国の視点でしかものを見れなくなるわけです。

その間に、地球のほかの所では多くの人が飢えて死んでいると。自分たちは飽食を貪って、途上国の人たちは飢えていると。世界には全人口を養うに十分な食糧がありますが、日本などに偏って供給されるから、飢えている人たちがいます。そんなことにも気付かない、敏感になれなくなっているのです。

そうすると、地球の外から客観的に見ると、日本人ほど貪りが強いということになります。

途上国援助（ＯＤＡ）に見る日本の価値観

ここで一つ、世界銀行の総裁のコメントを出したいと思います。これは朝日新聞に二十六日に載ったものです。世界銀行は、今の世の中では、それなりに地球全体のことを考えている国際金融機関です。

> **貧困がテロリスト生む温床に　途上国に市場開放して支援を**
> **ウォルフェンソン世銀総裁に聞く**
>
> 世界銀行のウォルフェンソン総裁は二十五日、朝日新聞記者と会見し、途上国の貧困問題がテロリストを生む温床になっているとの認識を示し、先進国による貧困国への積極的な支援を改めて求めた。十一月上旬に開催される世界貿易機関（ＷＴＯ）閣僚会合でも先進国は途上国に市場を開放し、貧困国の経済成長を下支えする方策を議論すべきだと主張した。一問一答は以下のとおり。
>
> ――米国での同時多発テロ事件以降の世界経済の停滞が途上国の経済に与える影響は。
>
> 「テロが起きた九月十一日以前から景気は後退し、農産物など商品価格は二年連続で下がり、その輸出国である途上国の経済は減速しつつあった。テロ事件で需要は減り、商品価格もさらに下落する。結果として、〇二年の途上国の成長率は当初見込みの四・三％から

三・五〜三・八％に落ち込むと見ている。経済活動の停滞は、貧困から脱却するスピードを落とし、生きること自体が危機にさらされている貧しい人たちを直撃する」

――途上国の貧困が改善されなかったことがテロの遠因ではないでしょうか。

「貧困とテロは直接的には関係しない。貧しい人たちは一般的には他人を殺すというよりも、自分自身の生き残りに関心を持っているからだ。ただ、貧困や不平等の中で生きるか死ぬかのぎりぎりの生活を強いられたとき、人々は希望を失い、テロリストを生む温床にはなる」

「全世界六十億人の中で一人あたり一日二ドル以下の収入で生きている人が途上国を中心に三十億人いる。二十五年後、人口は八十億人に増えるが、そのほとんどは途上国で、貧しい人も増える。貧困を解消するための戦いは平和への戦いだ」

――先進国の政府による途上国援助（ODA）は過去十年間で半分近く減っています。

「先進国はODAを国民総所得に対する比率で〇・七％を目標にしているが、今は〇・二％程度まで減っている。経済のグローバル化が進み相互依存関係が深まり、国際的な支援の必要性が高まったのに、実際は逆の方向に行ってしまった」

「世銀は終始、先進国と途上国との間に壁はないと訴えてきた。貧困による環境破壊、伝染病などは国境を越え、貧困は先進国を含めてすべての人に影響を与える。しかし、先進国にそうした認識はあまりなく、先進国と途上国との間には壁があると思っていた」

――グローバル化は本来は壁がなくなることを認識することなのに、なぜそうなったのか。

「先進国の政治家の指導力、理解力の欠如の結果だろう。先の米大統領選での討論で開発援助など国際問題

が語られたのはわずか二分だった。ほとんどの有権者は年金や教育、健康保険などの国内問題に関心を持っており、国際的な関心は薄い。それは日本でも同じだろう」

――途上国の貧困問題を解決するために何をすべきですか。

「ODAの水準を引き上げることだ。貧困の解消が先進国の利益にもなるという認識を持つべきだ。また、先進国の市場を開放することも必要だ。先進国の農業補助金は年間三千億ドルに及び、農産物に対する関税も高い。先進国が自国の市場を開放すれば、一千億ドル程度の途上国支援をしていることになる。ODAが五百五十億ドル程度であることを考えれば、効果は大きい。WTOの中で先進国の市場開放問題が建設的に論じられることを期待している」

ところで、ある主婦のコメントが新聞に載りましたが、そのコメントというのは、「わたしたち日本人がこんなに不況で苦しんでいるのに、なんで途上国に多額の援助をしなきゃいけないいんだろうか」という内容です。

その人は真面目にそう言っています。実際、小泉内閣の緊縮財政のために、今年は一〇パーセントカットということになります。なぜなら日本が不況だからと。

これは、たとえて言うと、ある人が千円持っていたとして、それが毎年十円ずつ増えていたとします。これは経済成長のたとえです。つまり、千円、千十円、千二十円となっていた。しかし不況になって、それが今年増えないと。だから、これまで毎年二円だけ貧し



い人に回していたけれども、それを今年はもっと減らさなければならないと。そういう感じになっています。
これが、今の日本の価値観だということになります。

布施する・しないが世界の行く末を決める要因に

ですから、これが今の日本人、ないし先進国のカルマであると。その日本人が施しの実践くらいしないならば、どうなるでしょうか。これは、非常に大きな貪りのカルマを積むと言わざるを得ません。
実際、仏教的に言うと、貪りのカルマは、例えば病気でいうと癌につながります。そして、実際、日本では死因として癌が非常に多い。しかも消化器系が多い。これは食の貪りかもしれません。また、癌以外でも、裕福すぎる生活によって生じるコレステロール過剰による、脳血管障害や心臓病で死ぬ人が多くいます。だから死因にも、貪りが反映されています。

そしてわたしは、今後、二十一世紀において、日本人として生まれた人たちが、地球人類に対していろんな意味での施しの実践をするというのは、最低限必要なことじゃないかなと思っています。

その実践をしていかないと、将来、この地球というのは持たないだろうと。安定しては存続できないと。今のまま先進国が貪っていると、途上国から、要するに死に物狂いの反発を食らうぞ、というのが最近のイスラムの事件になるでしょう。

ですから十年、二十年後は、先進国では財施の実践をするのが当然というか自分たちの利益である、というふうに価値は変わっていくことを期待しています。そうなるかならないかが、世界が安定するかどうかを決める要因になるでしょう。

途上国に対する慈善活動にも力を注ぎたい

この教団ついても、旧教団の事件の賠償の負担はあるわけですが、余力があれば、徐々に昔と同様に、途上国に対する慈善活動というのを一つの救済活動としてやっていきたいと思っています。

今の教団を見てみると、やはりまだ社会の誤解は強いと思います。そして、わたしたち



の教団とは関係ありませんが、イスラムのテロリストの問題、その被害者、余波を受けるアフガンの難民の問題が出てきました。また、最近のアメリカの炭疽菌の事件は、米国内の極右主義者の犯行も疑われています。テロリズムが激化し、多様化し、世界に広がりつつあります。

この世界の社会状況の中で、わたしたちの教団が、今後、テロリズムは行なわず、かつ、世界の大きな問題の解決に貢献するという姿勢を明らかにするためにも、そういった慈善活動は大切になってくると思います。

九〇年代の事件によって、わたしたちは反社会的な団体だといわれました。そして、最近のイスラムの事件が起こって、イスラムサイドから見ると、この社会というのが罪深く見えるという見解が出てきました。つまり、現代の社会の正当性が疑われてきたのです。

もちろんこれは、テロリズムを正当化するものではありません。でも、その背景に社会の問題があるということは指摘されてきました。ここで、アレフとしてやるべきことは、テロリズムを

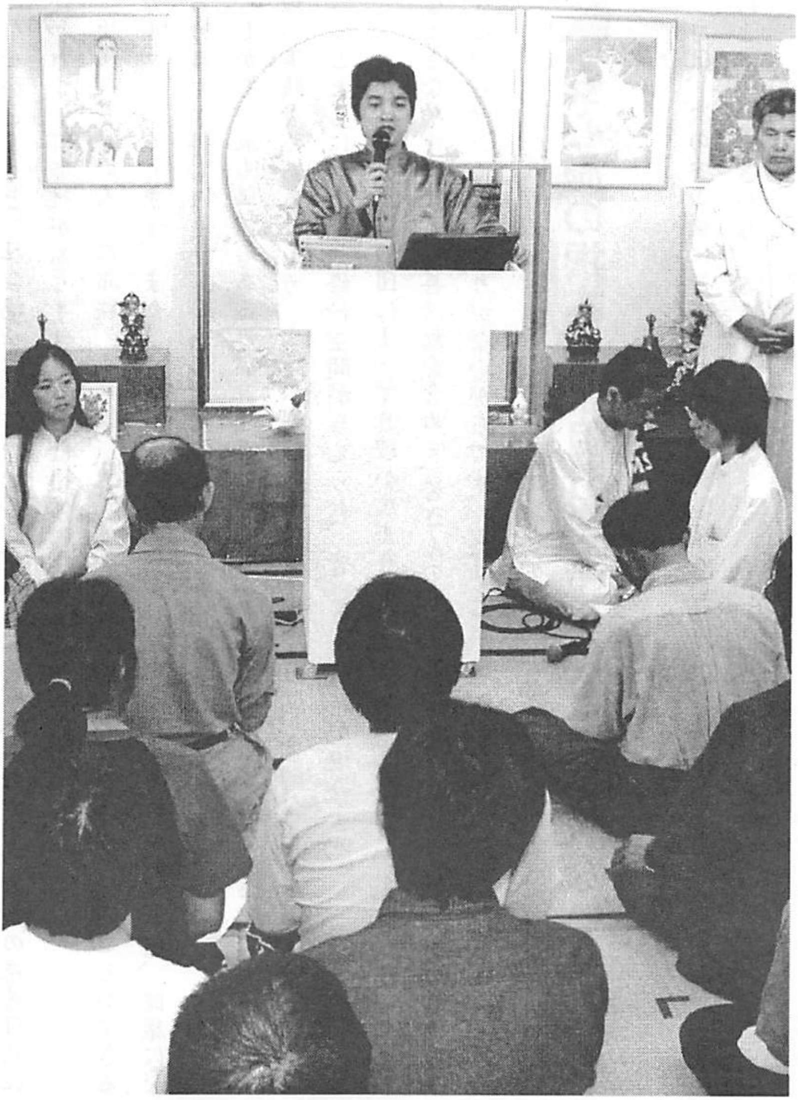
解決手段としては否定しながらも、社会の問題の存在は訴えていくことだと思います。

しかし、単に訴えるだけでは何も救済されないし、場合によっては、自己正当化のように聞こえます。よって、テロリズムの被害者や、テロリズムに対する戦争の被害者・難民を支援したり、また、テロが起こる温床になっている貧困の問題を解決するために、自分たち自身の具体的な実践が必要です。

これは、教団としては新しいことではありません。慈善活動は九〇年代からもやっています。ただ、今後は新教団・アレフとして、テロを否定しながらテロの背景にある社会問題を訴えていくという姿勢を打ち出し、それに関係ある対象を中心に援助していきたいと思います。それは、過去の事件のために教団が受けている、社会からの誤解を和らげることにもなるでしょうから、単に貧しい人への財施ではなく、三宝への財施にもなります。

最も価値ある「三宝への財施」

古い信徒さんは、教団では、財施には大きく分けて三つあると説いてきたのをご存じですね。社会福祉団体への布施、貧しい人への布施、そして真理・三宝への布施です。そして、後に行くほど価値が高いと。



なぜかと言うと、社会福祉団体については、そこにお布施をしても、本来の慈善目的に使われない可能性があります。これは団体によりますが。

次に、貧しい人への布施。これは、あなた方が貧しいときに布施を受けることができるカルマをつくります。または、貧しくて病気になっている人などに布施すれば、健康になるカルマが得られます。いわゆる成長天のカルマが得られます。

しかし、最も価値のあるのが真理・三宝へのお布施です。皆さんが皆さんにとっての真理の実践者であるサンガ、出家教団にお布施をするならば、霊的なエネルギーの交換が起こるとともに、法則や修行空間が与えられ、皆さんの修行が進みます。

それだけでなく、教団によって真理が広まります。さらに、教団は、先ほど言ったような大きな功徳になる慈善活動を含めて、皆さんの功徳が最大化するようにお金を使います。なぜならサンガには貪りがないからです。こうして、皆さんの功徳は非常に高まります。

安心施の根本――自分の幸福にとらわれない

では、次の安心施に行きましょう。安心施というのは、苦しんでいる人に対して、法則によって安らぎを与えるというものです。

この教えの根本にあるものは、結局、自分の幸福にこだわらないということだと思います。つまり人間というのは、自分の安らぎや苦しみばかりにとらわれていると。自分のことばかり考えていると。しかし、それがゆえに苦しんでいるというのが真理です。「自分を愛し過ぎるがゆえに自分の境遇について苦しむ」と言ったらわかりやすいかもしれません。

しかし、自分を愛することはやめにくいものです。ではどうしたらいいのでしょうか。そこでできるだけ多くの人を愛そうと。それによって自分ばかり愛することは減っていきます。

また、他人の苦しみを取り除いた果報として、自分が苦しんでいるときにその苦しみを取り除いてくれる人が現われます。これはわかりやすいですね。愛する人は愛されます。

結局、苦楽というのは相対的なものです。「自分はなんでこんなに不幸なんだろう」と悩んでいる人は、日本にも山ほどいます。世界では十億人の人が飢えて死にそうなのに、この日本に生まれて豊かな平和な暮らしをしている人が、年間三万人以上自殺するし、半数はストレスで悩んでいるともいわれています。

これは、人が、自分の幸・不幸ばかりにとらわれて、他人の不幸にはなかなか心を向けない癖があって、自分の狭い世界の中で、自分より幸福そうな人を見ては嫉妬したり卑屈になったり、今までの自分に比べてちょっとでも不幸・不自由になると、すぐ落ち込む。

そして、自然な結果として他人のことはあまり考えない。こうして自分で苦しみ、それを助けてくれる人もあまり出てこないわけです。

ですから、あなたがまだ自分の苦しみが完全に消えていないとしても、できる範囲でいいですから、他人の苦しみを聞いて、それを取り除きましょう。

また、日本人としては、二十一世紀において、世界・地球を見なくてはいけないと思います。日本という狭い国の中で、王侯貴族のぜいたくな悩みで一喜一憂するといった、ある意味ではバカなことはやめて、広い心、広い視野を持ってほしいと思います。そして、その広い心はあなた方を真に幸福にするだろうし、価値のある存在にするでしょう。

それからもう一つ言うと、自分が苦しいときほど、他人の苦しみを聞いて取り除く場合の功徳は大きくなります。これはわかりますよね。その理由は、このカルマによって、自分が非常に苦しいときに、それを取り除いてくれる人が現われるということがあるわけですけど、それだけではありません。自分が最も苦しいときに他人のことを気遣う人は、そう努力する人は、それによって、自分だけを愛するという苦しみの根本原因を相当に弱めていることになります。だから、こういった安心施が最も功徳が高い、効果が高いということになります。

縁ある人すべてに真理の布施を

三つ目に行きましょう。これは真理施ですね。先程から話してはいるけれども、これは要するに真理の教えを流布するということです。

安心施と法施の違いは、安心施は苦しんでいる人を安らがせるという意味がありますが、真理施というのは、今苦しんでいる人も苦しんでいない人も、真理の教えを知らなければいずれ苦しむときが来るのだから、縁のある人すべてに真理の教えを布施するというものです。

この実践の果報は、皆さんに、より高度な真理の教えが与えられたり、来世も真理の教えに導かれたり、真理から外れそうなときに導いてくれる人が現われたり、という形で還元されます。そして、自分だけが真理を知っていればいいんだという心、これを捨断して、他人にも真理を与えようという心を培うことになります。

だから、財施・安心施・真理施というのはすべて、「自分だけ豊かであればいい」「自分だけ安らげばいい」「自分だけ真理を知っていればいい」というエゴからあなた方を解放して、本当の意味で幸福にする道なんだというふうに考えていただければいいと思います。

救済活動は真理施・安心施・財施がセット

それから、教団としても、世界を救済していこうとしたら、先程言った慈善活動における物質的な援助、これはやるわけですが、最も重要なのは真理施だと考えています。というのは、途上国の人たちに物を分け与えても、それでは一時的にしか良くなりません。最低限必要な物は分け与える必要がありますが、人の幸福にとって最も大切なのは「教え」です。そうでないと、彼らが経済的に安定するだけにとどまらず、物欲が増大してきて、将来において第二・第三の日本なんかになってしまったら、地球環境の方が持ちません。

今でさえ、中国や東南アジアの巨大な人口が生活水準を上げてきたら、どうやって環境問題の激化を食い止めるのかとか、食糧その他を供給するのかという問題が解決されていません。環境や食糧の問題が出てくれば、激しい摩擦が起こり、下手すると紛争が起こります。

だから、物を分け与えることと同時に、必要以上に物にこだわらず、さらには、物を分け与えるという教えまでお布施しないと、世界は良くならないと思います。

ですから、救済活動としても、真理施・安心施・財施がセットだなと思います。



皆さんの布施なくして未来の人の幸福はない

最後に、現在は、教団は九〇年代からの流れの中で、いわば再建の過程にあります。客観的に見ると非常に苦しい時期だと言うことができるでしょう。わたし自身は苦しみを喜びにして、やりがいにしていますが……。

この苦しいときに、皆さんがなさる布施というのは非常に価値があります。それは、教団が再建された後の布施と比べてはるかに大きな功徳になります。なぜなら、皆さんの今現在の布施が、未来の教団のすべての土台になるからです。皆さんの今の実践なくして、将来真理に導かれるすべての人の幸福はあり得ないからです。

それをよく考えていただき、わたしたちサマナと共に、全力を尽くしていただきたいと思います。

特集1

慈愛・神通・法の体現者、あのチッタカ正悟師が東の道場担当に

新風吹き込む ―


道場活動に、




ハイレベルの神通力と説法、周りの空間を一変させるサマディ、どんな人の心にも光をもたらす慈愛の波動と笑顔――。これまで、宗教団体・アレフの出家修行者を中心に修行面・精神面で大きく支えてこられた聖者の一人、あの光音天のチッタカ正悟師が、十月上旬から東京道場に常駐になり、現在、東日本を中心とした信徒の皆さんの教化育成に携わっていらっしゃいます。

これは、事件後の厳しい環境の中で、少しずつ蓄積してきた信徒の皆さんの功徳と善業、それに純粋な求道心が、大きく花開き始めた一つの証でもあると言えるでしょう。

チッタカ正悟師といえば、サマナの間でも、慈愛の人・優れた瞑想家・神通力者として知られるマハームドラーの成就者です。

今月の「進化」特集1では、新たに道場活動の担当になられたチッタカ正悟師の〝救済者としての側面〟を中心に、いろいろな角度から紹介していきたいと思います。



すべての人を高い世界へ連れていってあげたい
——チッタカ正悟師インタビュー

チッタカ正悟師は、皆さんもご存じのように、一昨年十二月に教団に戻ってこられて以来、アレフの持つ聖なるエネルギーを結集した〝師・サマナの専用道場〟である「光音天」を立ち上げ、発展させてこられました。修行プログラムの研究や、多くの人を神秘の世界へといざなった実績を持つ、「ピラミッド・イニシエーション」などの研究・開発にも携わられたのです。

実際、皆さんの中には、光音天の空間やピラミッド・イニシエーションの恩恵にあずかった方も、たくさんいらっしゃるのではないでしょうか。

チッタカ正悟師のいらっしゃった光音天には、正悟師の霊性・神秘性、そして聖慈愛・聖哀れみの深さ・広大さにまつわる数々のエピソードが存在しています。

その詳しい内容は、本誌P33「正悟師の慈愛は尽きることなく——師・サマナに聞く〝救済エピソード〟の数々」に譲るとして、ここでは正悟師に、神通力の体験や慈愛の実践の背景にあるもの、そして、このたび道場活動を担当することになられたことに対する抱負などを語っていただきました。

これからの救済には〝化け物〟的要素も必要だ

——チッタカ正悟師の神秘力は、だれもが驚嘆するほどハイレベルなんですが、その中でも特に、サマナと一緒に瞑想されたときのエピソードがすごかったです。

（正悟師）以前は一緒にいると、ときたま相手の状態が伝わってくることがありましたが、いつでもわかるという感じではありませんでした。でも今は、一緒に瞑想したら全部わかりますね。どこで引っ掛かってて、どこで漏れているとか。「あなたこういう状態でしょ」と言うと、だいたい当たっているという感じですね。

――単に相手の状態がわかるだけでなく、サマディに入ってその人の心を止めたり、あるいは高い意識状態へと導いたりしたともお聞きしましたが……。

（正悟師）実際それをやってあげた人は、だいたい心がまず静かになって、なおかつ広がりを感じると言います。しかもそれは、普段の修行ではあまり経験しない状態だそうですね。

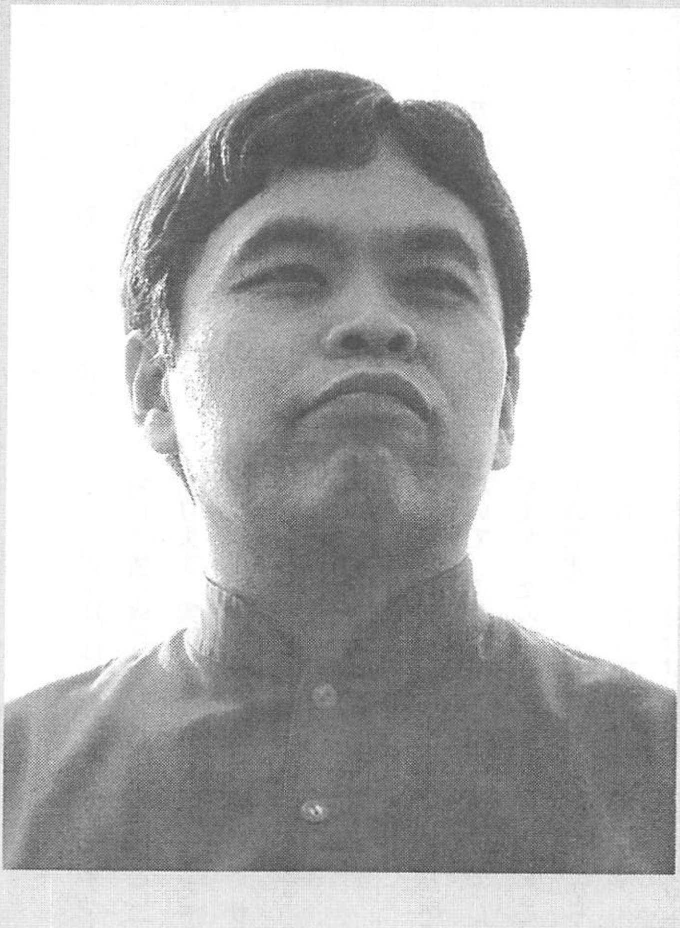
――具体的な事例を紹介していただけないでしょうか。

（正悟師）この間行なった人は、それまでは人といると緊張してしまって究竟[※1]に入れたことが一回もなかったのですが、それが初めて入ることができたって言っていましたね。

また、別の人の例を挙げると、その人は、エネルギーがアージュニアーとヴィシュッダとアナハタで広がっていて、そこに歓喜のエネルギーが生じて、その歓喜によって漏れている感じがあったんです。そこで、「あなたはツァンダリーが好きですか？」って聞いたら「大好きです」と。彼女は、ツァンダリーを回して甘露によって歓喜を味わって、そこで満足している状態だったんですね。

ただ、ツァンダリーの瞑想をよく見てみたらわかりますが、その先があるわけですね。そこで、「歓喜は歓喜でいいけれども、それはまだ途中の段階だから、

※1　究竟：エネルギーを拡散していって、すべてを空に還元してしまう瞑想のこと



次の段階に入ることを目指して意図的に歓喜を止めることを意識してごらんなさい」とアドバイスをし、その場で一緒に瞑想をしてあげたんです。そうしたら「前より心が安定しました」と。実際、わたしが彼女の状態を霊視してみると、アナハタとヴィシュッダの漏れが止まって、わずかにアージュニァーが漏れているような状態に変化していたんです。

――正悟師の場合、神秘的な力を具体的に表現されるため、高いステージの人がどういう能力をお持ちになっているのかがよくわかります。サマディに入りながらの説法をみんなの前でされるとかもそうですし……。

(正悟師) そうですね。ちょっとそういう見世物的なものが好きなのかもしれません(笑)。しかしまあ、ある意味では、これからの救済においては、そういう人間離れした〝化け物〟的な要素も必要なのではないでしょうか。

――「神秘性」はもちろんですが、チッタカ正悟師に対して強く感じるもう一つの要素として、「慈愛」があります。実際、正悟師の慈愛の深さや柔らかいヴァイブレーションに好感を持っている、サマナや信徒の皆さんも非常に多いのではと思います。これについてはいかがですか?

(正悟師) わたしの場合、やはり刑務所に入れていただいて、プライドをこてんぱんに落としてもらったのがよかったのかなと思っています。そこでは単なる一人の犯罪者として扱われるわけですから、プライドも何もあったものではないですね。

だから、自分は正悟師で相手はサマナであるとか、あるいは信徒さんであるとか、凡夫であるとかといっ

た意識は、わたしにはもう全然ないんですよ。「この人は今こういう状態で苦しんでいるんだなあ」というようなことを感じることはありますけど、だからといって、どっちが上とか下とかという意識は全く出てこないんです。

自分としては、単なる法友みたいな気持ちの方が強いものですから。まあ、だから話しやすい部分があるのかもしれません。なおかつ、わたしは四年半、要するに法友の方々と離れ離れになっていたわけですから、法友にすごく飢えていた部分があったんですよね。これはある種の情なんでしょうけれども。

そして、出てきてやっと法友にまた巡り会ったわけですよね。だから、もう法友と会えるだけでうれしいという感じでした。相手がどんな人でも、サマナでも信徒さんでも、会って話をすることだけでうれしいというのがあって、それは今でも持続しているんですよね。

そういう経験をしたことで、本当の意味で法友の大切さを身に染みて教えていただいたというか。やっぱり一人一人は掛け替えのない魂なんだなと思えるようになって、その気持ちが続いているわけですね。

道場活動に、智慧とエネルギーのすべてを注ぎたい

――今回、道場活動を担当されることになったわけですが、どのようなお気持ちですか？

(正悟師) 救済の前面に立って活動することになりますので、非常に大きな責任を感じています。今まで裏方ばかりやってきましたので、まだピンと来ていない部分がありますが、自分自身の修行経験が信徒さんの役に立つであろうことだけは間違いないと思います。

したがって、あとはもう全力で、自分の得た修行の

素晴らしさを接する人一人ひとりに分け与えていく、これをひたすらやり続けるしかないだろうなと。今はそれしか考えられませんね。

自分自身としては、非常に素晴らしい成就の体験を与えられましたし、それを多くの人に分け与えていかなくてはならないと思っています。ですから、そのために自分自身の智慧とエネルギーのすべてを注いで、できることをやっていかなくちゃいけないなと思っています。

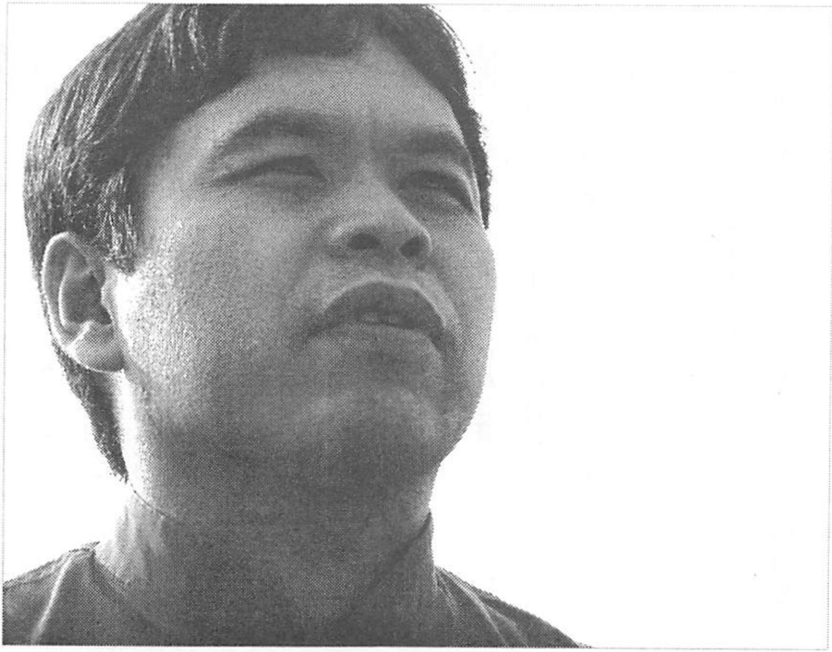
——今まで説法会などで各地の道場を回られて、信徒さんの状態はある程度ご存じかと思いますが、どのように感じていらっしゃいますか？

（正悟師）本当に愛おしいですね。これだけ厳しい状況の中で、ずっと付いてきてくださって、本当に自分の求めるものがこの教団にあるんだということを常に認識しながら修行なさっているわけだから。この人たちを何とかして、より高い世界へ連れていってあげたいなと思いますね。

こうやって、この厳しい状況の中でみんなで修行してきたということは、過去世からの長い付き合いというか、親密な法友としてのつながりがあるんだろうなと。初対面の人でもそういうことを感じますね。

——シークレット・ヨーガなどはされてないんですか？

（正悟師）それは何人か行なってますよ。確かに事件の影響でだいぶ疲れているなっていう感じはありますが、その苦しみに耐えて修行するのも、心の必要なプロセスですからね。だからいずれ、その苦難に耐えた果報というものが訪れなくてはいけないし、その時期が必ず来るだろうと思っています。



特集1

――確かにあの事件は、わたしたちにとっても大変つらい出来事でしたが、正悟師はこの辺りはどのようにお考えでしょうか。

（正悟師） 事件そのものは完全に否定されるべきものですね。あのようなことが起こってしまったことは非常に残念です。

あの事件によって、被害者の方々やご遺族の方に非常に大きな苦しみを与えてしまったわけですから、その責任は重大であり、教団として最大限の償いをしていかなければならないものと考えています。

確かに、物質主義で行き詰まっている社会において、精神的な幸福、究極的には解脱・悟りを追求するという、旧教団が掲げた思想自体は正しかったと思います。しかし、その理想を実現する手段として、犯罪を犯したり武装化したりすることは一切受け入れることはできません。

わたし自身も、事件の一端にかかわったとして逮捕・勾留されたわけですが、わたしとしては、自分の行なってきたことが、そのような目的のもとになされていたということは全く知らなかったわけです。でも、結果的に社会に大変なご迷惑をおかけしてしまい、非常に申し訳なかったと思っています。

教団を巡る情勢がこのような状況になってしまったことも、結局はわたしたちの心のけがれ、カルマの現われですから、それを真正面から受け止めることが大切だと思います。

被害に遭われた方々にはきちんと償いをして、わたしたち自身は、この一連の事件に対する反省のもと、より一層心を成熟させていくことができれば、と思っています。

——マイトレーヤ元正大師も、今、信徒さんの上向を強く意思されていますが、その流れの中で道場活動に携わられることに対して、いかがお考えでしょうか。

(正悟師) はい。道場に配属されるに当たって元正大師がおっしゃっていたのは、導く側が本当の意味で神秘性があって、「この人に付いていったら必ず救済される」という確信が持てるような人じゃないと、救済はやはり成功しないいんだということでした。

元正大師は、「本当は自分でやりたいけれども、今の状況ではそれは不可能だから、代わりにやってくれないか」とおっしゃってくださったんですね。

代わりが勤まるかどうかわからないですが、いずれにしても、自分自身もそれなりに修行の素晴らしさというのを認識しているし、それを伝えることはできるだろうと考えていますので、それをやっていきたいと思っています。



正悟師の慈愛は尽きることなく
——師・サマナに聞く〝救済エピソード〟の数々

それでは次に、光音天における、チッタカ正悟師にまつわる〝救済エピソード〟の数々をご紹介することにしましょう。

群を抜く神秘性・霊的能力
——「瞑想に入って相手を高い意識状態へといざなう」

チッタカ正悟師は、成就者方の中でも群を抜いて「神秘力」に長けていらっしゃいます。特に、いつどこでもサマディに入ることのできる能力をフルに発揮され、それまで遠い存在に感じられていた神通力者の世界を、身近に、しかもいろいろな形で現わしてくださっています。

◉神秘力によって救済する

光音天で修行監督をされているパヴィッタ師は、正悟師の神秘力による救済を目の当たりにして、次のような感想を述べていらっしゃいます。

◎道場空間を一瞬にして変えられる

チッタカ正悟師は、光音天の二階・三階で、たまに修行監督をされたり、みんなにスーパー甘露水でエンパワーメントされたり、さらには、太鼓を叩いたりマイクで声を張り上げて励ましたりされるわけですけれ

ども、それによって瞬間的に空間が変わってしまいます。

また、最近の説法でよく見られるのですが、いったんサマディに入ってその状態で話されることがあります。正悟師がじっと精神集中を始められ、識別を止める作業に入られると、その段階で空間がガラッと変わってしまうのです。その状態で言葉を発されることによって、それを聞く人の方も心の深い部分に響いてくるわけです。あの説法の仕方は「すごい」と思います。あのような方法は、あまり見たことがありません。

師の方が修行監督をやるときには、思いっ切りエネルギーを蓄えて、例えばわたしなどは必死にエネルギーを振り絞って、どうにかこうにか影響を与えることができるわけですが、正悟師はじっと集中されてポンってやればすぐに変わってしまいますから、この辺りはもう「非常に大きなステージの違いだなあ」と思います。

深い意識に入って法則を説く――、今や、これがチッタカ正悟師の説法の一つのスタイルになっています。こうした法則の説き方は、ある種の追い詰められた状況の中で正悟師自ら編み出されたものですが、そのときの様子をあるサマナに語ってもらいました。

◎本物の聖者がここにいることに深い感慨を覚えた

あるサマナ対象の集中修行の開会式で、チッタカ正悟師が説法されたときのことです。

前夜にワークの関係で全く睡眠が取れず、覚醒状態でいらっしゃった正悟師は、説法の内容を準備することができませんでした。そして「このまま思いっ切り（意識が）突っ込んだ状態で話をしたら、勝手に口が動くんじゃないか」とふとお考えになり、深い瞑想に入られたままでご説法されました。

それは単に思いつきでなされたようなのですが、それがものすごい効果を生んだのです。一瞬にしてその

場の雰囲気が変わり、こちらの意識までが大変深くなっていき、会場は一種独特なムードに包まれました。その状態で、普通では聞くことができない、非常に高度な法則を説いてくださったのです。その説法は目の覚めるようなものでしたので、一言も書き漏らすまいと必死にメモを取りました。

そして、正悟師はご自分の状態を説明され、「今自分は、サマディに入った状態で、このように前に立ち、動き、話しているのである」と明言されたのです。

本物の聖者がここにいらっしゃるのだということがまさに実証されたことに、わたしの真我は歓喜し、本当にこの教団に、聖者に至る道、解脱・悟りに至る道があるんだということ、そして、偉大な先達がここにいらっしゃり、魂の進化をなすことのできる環境に身を置かさせていただけることに、本当に心から感慨の思いがわいてきました。

チッタカ正悟師の持っている神秘力の中でも極め付きは、何と言っても、瞑想の力によって、他の魂を瞬時に煩悩滅尽の境地や高い意識状態へといざなう能力でしょう。

以下は、正悟師のスーパーパワーを身をもって経験した二人のサマナの体験談です。

◎修行者としてのピンチを神秘の力で救ってくださった

チッタカ正悟師は、わたしが調子を崩していると、よく一対一で一緒に瞑想を行なってくださいました。そのときは毎回のように神秘的な体験をさせていただいたのですが、その中でも最も印象に残っているのは、瞑想をしているときに、正悟師がわたしに代わって、わたしの中にある煩悩を止める作業をしてくださったときのことです。

向かい合って瞑想を始めると、すぐに頭の上方に引

き上げられる感覚と、アージュニァー・チァクラに強い圧迫が生じました。そして一時間ほどで瞑想が終わると、それまでわたしの心の中にあった否定的な思いや雑念が一切なくなって、非常に修行しやすい意識状態に生まれ変わっているのです。

瞑想の後、正悟師はいろいろと話をしてくださるのですが、正悟師によると、瞑想中にわたしのアージュニァー・チァクラから体内に入り込んで、そこにあった多くのけがれたデータを、思念の力によって一つ一つ止めてくださったというのです。

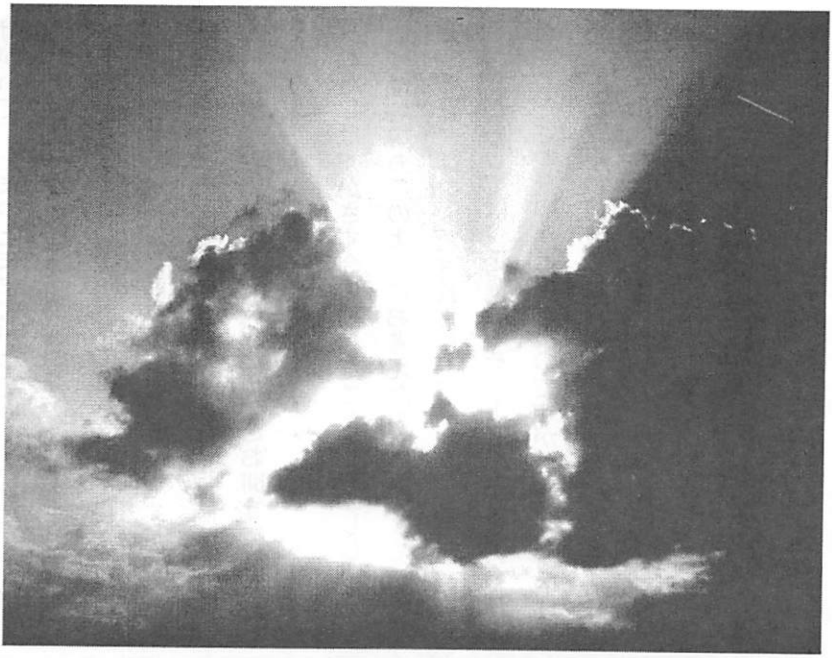
また、瞑想中に、目の前にいるはずの正悟師の気配が全く消えてしまったこともありました。そのときは、正悟師の意識はわたしの頭頂から入ってきて、完全に同化していたのだそうです。「自他の区別は存在しない」ということが、身に染みてわかった出来事でした。

このような形で、わたしは何度となく修行者としてのピンチを、正悟師の神秘の力によって救っていただいたのです。

◎高いイメージや意識に遭遇させていただいた

チッタカ正悟師は、機会を見つけては、いろいろなサマナと瞑想実験をされていました。わたし自身も何度か、みんなと一緒に、あるいは一対一で正悟師と瞑想する機会に恵まれました。そのときのことです。

大勢のサマナを前にして、瞬時に深い瞑想状態に入られる正悟師。そのお姿を見ているだけでわたしの意識は止まり、エネルギーが強く上昇し、ダルドリーが起きました。上方に飛ぶダルドリーと同時に、正悟師目掛けたダルドリーも起こります。まるで正悟師の真我に引き付けられるような、吸い込まれるようなダルドリーが起こるのです。これは、正悟師が、識別を止め、自と他の区別をなくす作業を深い瞑想の中で行なわれてるからなのでしょうが、多くのサマナが経験し



特集1

たものでした。
また、正悟師と一対一で瞑想させていただいたときのことです。そのときは最初から正悟師の気配が全くなくなってしまって驚きました。目を開けて、「ああ、こういうお顔で……」と確認してまた目を閉じます。するとどうでしょう。大小無数の「救済」という二文字が頭の上いっぱいにわいてきて、グルグル回り出し、「もうこの地球もこの欲六界もすべて、みんな残らず絶対に救済するんだ！　救済するぞ！　救済するぞ！　救済するぞぉーー！」というすさまじいまでのイメージがわいてきて、トゥモやダルドリーが起こり、体全体から白銀のエネルギーが上昇して全身が快感に満たされていくのです。
そして今度は、「愛したい」「与えたい」という感情やイメージが心に強くわいてきて、何とも言えない至福感に包まれました。そしてすべてのイメージが止まり、白く広い空間に、シヴァ大神と正悟師とわたしだ

けがいて、止まったまま広がっていきました。そのうちにだれもいなくなって、空間だけになったのです。

あいにくその状態に慣れていなかったわたしは、ちょっとしてから目を開けてしまったのですが、そのとき、まさにそれを察知されたように正悟師もパチッと目を開けられ、「どうだった?」とお聞きになられました。

わたしはすかさず今体験したことをお話しし、「正悟師はいつもこのようにお考えなのですか?」とお聞きすると、ニコッとされました。

わたしとしては、正悟師がそのようなイメージを与えてくださったのかと思ったのですが、実はそうではなく、ただ単に自分と他人という識別をなくしていっただけということでした。そして、自分とは違う異質の〝動くもの〟を止めていく作業をしていただけだったのです。「それで最終的には全く何もイメージがなくなり、白い空間にとどまり、広がったのか」と、今体験したことに納得がいったのです。

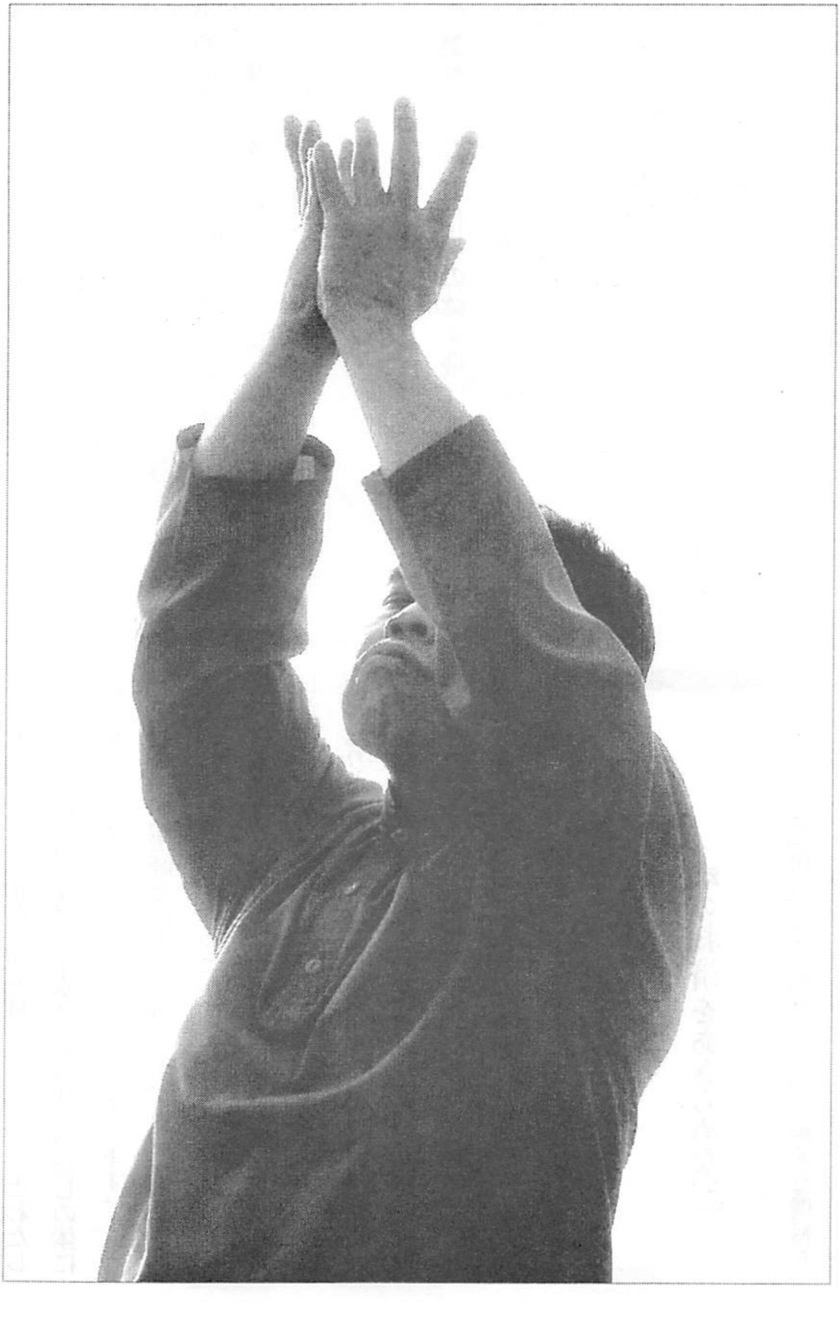
高いイメージや意識に遭遇させていただいて、何とも言いようのない感動がありました。そして、安らぎの空間はまさに、正悟師の空の片鱗を垣間見させていただけたのだという実感があります。

◉いろいろな霊的能力を発揮される

チッタカ正悟師は、上述した以外にも多くの霊的能力をお持ちです。そのことについて、パヴィッタ師にお聞きしました。

◎相手のエネルギー状態を霊視される

マハームドラーを成就されてから、正悟師はより的確に相手のエネルギー状態やバルドの状態を見抜く力を発揮されています。修行に来ている人たちやワークをしているサマナの状態を見ては、「だれだれはこう



いう色を発している」とかおっしゃっていたことがありました。

また、かつて、ここ光音天で信徒さんの集中セミナーがあったときに、ある信徒さんが記録的なクンバカ時間を達成したことがあったのですが、正悟師はその信徒さんを霊視されて、「青紫の光を発している」とおっしゃっていました。そういうのがすぐわかってしまうわけです。

◎気をぶつけて相手の体を飛ばす

また、チッタカ正悟師は、霊的能力をいかに表現するかということもいろいろ考えられているようです。その一環で、わたしと二人で気功の真似事をやってみたことがありました。

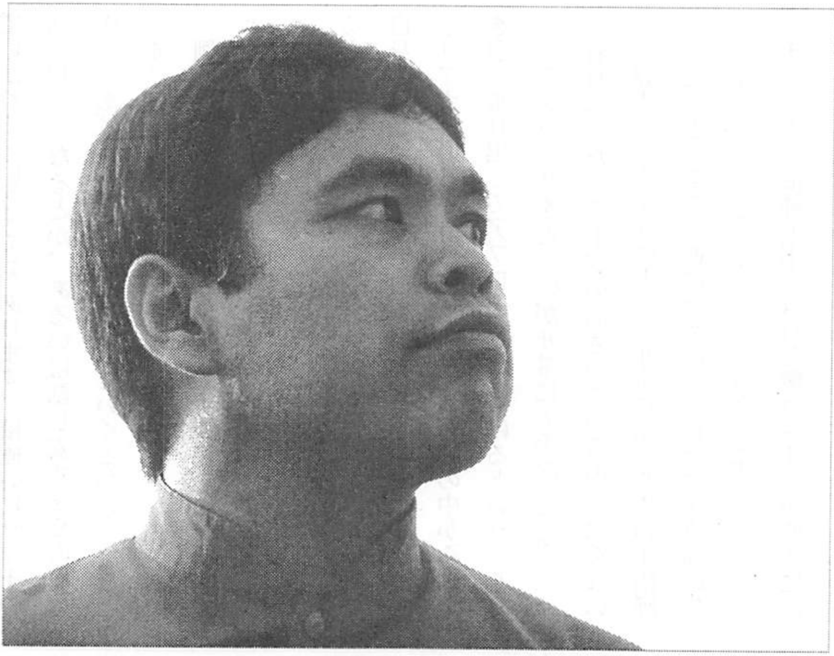
世間では、よく気功師などが気を発して相手を飛ばすとかいったことを実演していますが、わたしたちにもできるんじゃないかと思って、二人して気の飛ばし合いをやったのです。正悟師が気を練って、「フン」とわたしに向かって投げ付けると、実際に気の塊がわたしの体にぶつかってきて、本当にふっとんでしまいます。

それで、正悟師といろんなヴァージョンを考えて、相手の体を動けなくするとか、上に飛ばすとか、下に伏せさせるとか、いろいろと実験してみました。そのほか、ぶつかってきた気の塊を受け止めて相手に投げ返したりとか、そういうことも何度も繰り返しました。

正悟師は瞬く間に深い瞑想状態に入って、エネルギーをコントロールされるわけですね。それゆえに現象も大きく動かすことができるわけです。

慈愛の正悟師
――「どんな状況でも、魂の救済をあきらめない」

チッタカ正悟師は、多くのサマナから絶大な信頼を



寄せられています。それは、どんなけがれがそこにあったとしてもそれを背負うことを厭わない、どんな状態になったとしても決して見捨てることはしないという、広大な四無量心を身をもって実践されているからにほかなりません。

◉自ら周囲に溶け込んでいかれる

チッタカ正悟師の広大な慈愛の心の一端は、サマナに対するフォローの仕方に顕著に見ることができます。

以下は、光音天で修行監督をされているビルパ師のお話です。

◎みんなにとって打ち解けやすい正悟師

チッタカ正悟師が、大乗の実践として既に日常の中で体現させていることに、周りの環境に自ら溶け込ん

でいかれるということがあります。積極的にサマナの話し相手になるとか、あるいは話し安さをその場で作ってあげて相手の心をほぐしていくとかいったことです。

例えば、厨房にわざわざ行って、供養しながらサマナと談笑されたりするわけです。普通、供養というのは一人でするものですから、当初は、供養になっているんだろうかと思ったのですが、逆にそれが正悟師ご自身の瞑想になっているようなんですね。供養しながらサマナといろいろ話をして、その雑談の中から法則を引っ張り出してアプローチしてあげるという、そいういうスタイルをとるのが非常に上手なんです。

肩肘張ったステージの高さっていうのが全くないし、要するにみんなにとって非常に話しやすい正悟師なんだと思います。逆に言えば、それだけ正悟師の慈愛が深いということが言えると思います。

チッタカ正悟師の場合は打ち解けやすいがゆえに話もしやすい、そしていろいろと相談に乗ってくれる、この二つの点が大きな特徴になっていると思います。

自ら周囲の環境に溶け込み、積極的にけがれを吸収されるチッタカ正悟師。正悟師としての観念の枠を超えてまでも救済しようとされるお姿に、その場に居合わせただれもが心打たれたといいます。

◎自ら率先してエンパワーメントされる

わたしが光音天の二階修行班で修行をしていたころ、洗髪のために一階に降りてくると、たまにチッタカ正悟師が、サマナ相手にチャンバラのまね事をしているところに出くわしました。おそらく、苦しみを抱えているサマナとのコミュニケーションを図っていらっしゃったのだと思います。

チッタカ正悟師は剣道の有段者でもあり、大変お強いのですが、安全性を考えて試行錯誤で作ったスポン

ジの剣で、叩いたり叩かれたりしていました。体を使うのでサマナも元気になり、それにも増してエネルギーを頂いているようで、どんどん元気になっていくように見えました。

「気さくな方だな」と思いましたが、「もしかして出所されたばかりで、正悟師としてのカルマ交換がどのようなものなのかご存じないのだろうか」と、こちらが心配してしまうほど、当初からカルマ交換を恐れない方のようにお見受けいたしました。

カルマ交換による苦しみ以上に、サマナを元気付けたいという思いの方が強いのだということを後で耳にして、非常に心を打たれたのを覚えています。

◉限界まで苦しみを背負われる

チッタカ正悟師の救済は、文字通り命を懸けたものでした。何度も苦しみの極致を経験され、それを修行によって乗り越えられてきたのです。

正悟師がカルマを背負って苦しまれるお姿、そしてそれを乗り越えて器を広げられる様を目にしたことのあるサマナに、話を聞きました。

◎師・サマナのカルマを一身に背負われる

光音天は、ご存じの通り師やサマナが修行にやってくる場所です。当然、そこではカルマの解放があるわけですが、そのカルマはチッタカ正悟師が一身に背負われていたのです。

正悟師のお部屋は、道場とイニシエーション・ルームに壁一枚で隔てられているだけですから、毎日毎日ものすごい量のカルマにさらされていたと言えます。当然そこで経験される苦しみというのは、わたしたちには想像もできないほど大きかったに違いありません。

わたしは、正悟師の運転手をさせていただいてい

たことがありましたが、ある日、こんなことがありました。

正悟師はいつも助手席に座られるのですが、その日はシートを倒して横になっていらっしゃいました。時々寝返りを打たれるので、わたしは「ああ、正悟師、寝苦しいのかな」と思っていました。

しばらく経って正悟師がバッと起き上がって、「ああ、さっきは心臓が痛くて死にそうだったんだよ」と言われたのです。わたしはびっくりしてしまいました。

正悟師は、師のころは本当に寡黙で、自分の苦しみなんか表現しないで、淡々とワークをされる方だったらしいのですが、その方が「正悟師」になられて、これだけ苦しまれているのです。

この出来事で、正悟師がいかに命懸けで救済に当たられているかを思い知らされました。

◎限界まで苦しみを受けられ、器を広げられる

ある日、チッタカ正悟師が、ステージの高い方の例に漏れず、他のカルマによって大変苦しんでいらっしゃるという話を知る機会がありました。心臓が止まって「死ぬ」と思ったことも、幾度となくあったこともお聞きしました。実際には、相当な苦しみを受けていらっしゃるにもかかわらず、それをできるだけ表現されないらしいのです。

ところが、それでも時間が経つと突然元気になり、以前よりもパワフルになられるのです。そういうことは今までに何度もありました。正悟師は、苦しみを、瞑想によって、修行によって、ステージを上げることによって克服してこられたのです。

『器が広がる』とはこのことだ」と、わたしはよく尊敬の念を起こしたものでした。そして器が広がると、必ずと言っていいほど、どこかの部署を新たに持つことになるといった現象が起こっていたようです。



そして、それによってさらに負荷がかかり、また苦しみが始まる——。それを瞑想と修行によって乗り越えると、また新たな境地を開かれ、その器の大きさが現象として現われるのです。

救済者としての器をどんどん広げられていく正悟師のお姿を間近に見るにつけ、わたしの心の中は、「もっともっとステージを上げたい」という肯定的な思いに満たされていくのです。

◎決して見捨てない

縁ある魂が道を誤ること、それは、チッタカ正悟師にとって最も悲しむべきことでした。以下の体験談に見られる正悟師の妥協のない救済は、そういった深い哀れみの心が背景にあったのです。

◎決して救済をあきらめなかった正悟師

わたしとも縁のあるサマナが、自己の煩悩によって何度も〝心の揺れ〟を繰り返していたときのことです。そのサマナは正悟師とも深い縁があり、正悟師は、彼女の状態をとてもご心配なさっていました。

わたしは正悟師とともに、彼女に対して何度もアプローチをし、なんとか元気づけようとしていました。しかし、あるとき、「そういうことを何度繰り返しても、また同じ結果になってしまうから、もうやめた方がいい」とまで、みんなから言われてしまう事態になってしまったのです。

普通ならば、みんなの意見ももっともなため、やめてしまっても致し方ないのでしょう。けれども、そのような四面楚歌の状態に置かれても、正悟師は「どんな魂でも絶対にあきらめちゃいけないんだよ」とおっしゃって、とても深い哀れみの波動を出されました。

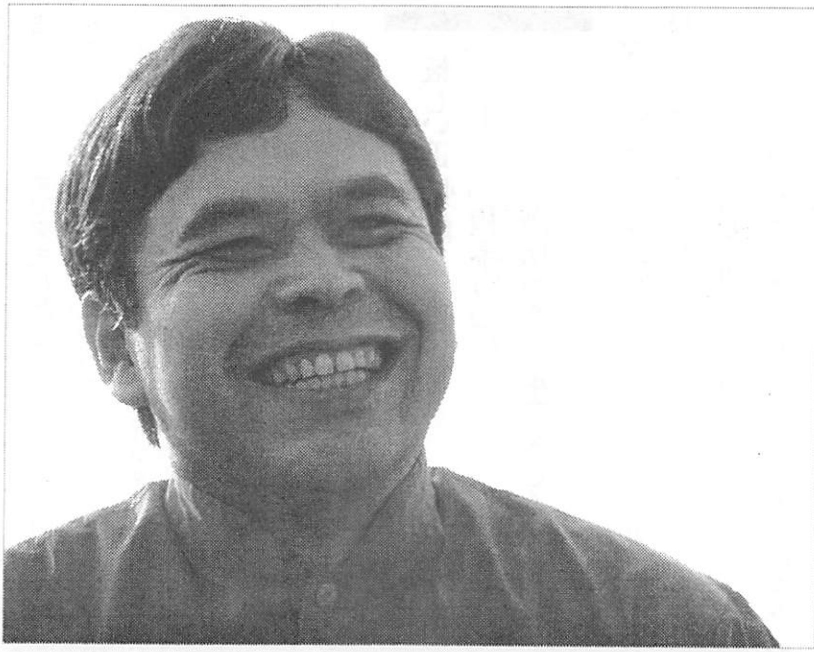
それがとてもとても深くて哀しいものでしたので、わたしは正悟師があきらめないとおっしゃるのであれば、何としてでもお手伝いをさせていただこうと思ったのです。わたしは正悟師の端々に現われる言動に、非常に深い信頼感と敬意を覚えました。

そのサマナは、今では激しい修行にも耐えられるようになり、紆余曲折はありますが、本当に頑張っています。もし、あのとき正悟師があきらめていらっしゃったなら、今の彼女はなかったのではないでしょうか。彼女を見るたびに、正悟師に感謝せずにはいられません。

◉人が上向するのを見るのが喜び

救済者は、常にすべての魂が上向するよう思念しています。それゆえ、縁ある魂の上向のお手伝いが少しでもできるなら、それは最高の喜びになるのです。

以下は、チッタカ正悟師が、そうした救済者の心を



お持ちになっていることを示す体験談です。

◎いつも人に尽くしたいと考えていらっしゃる

正悟師は、みんなに何かをしてあげて、それによってステージを少しでも上げてもらいたいという気持ちがすごく強いみたいです。

道場で、正悟師も含めてみんなで気功をやったときがありました。わたしはそのとき、エネルギーが下がって非常に調子が悪かったのですが、それを見た正悟師が、シャクティプラヨーガみたいな感じで、わたしに向かって指をグリグリグリと回しながら遠隔エンパワーメントをし始めたのです。

するとエネルギーが徐々に上がり、サハスラーラまで来て、それまでは卑屈で暗い意識だったものが一変して元気になることができました。

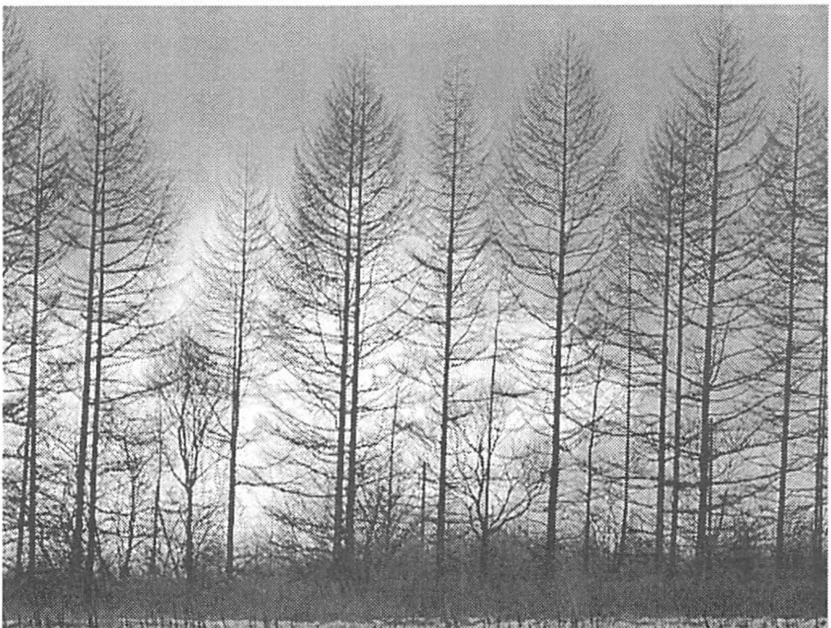
そのとき、エンパワーメントしていただくにつれて、エネルギーの上昇とともにわたしの意識が変わっ

ていくわけですが、わたしが「ああ、今、ここまで来ました、ここまで来ました」と言うと、正悟師は、輪を掛けたように一生懸命にやってくださったのです。

その作業が終わった後、わたしが元気を取り戻したことがとてもうれしそうで、ニコッと笑っていらっしゃいました。そのとき、人のために尽くしたいという正悟師の暖かいお気持ちが、ひしひしと伝わってきました。

厳しい正悟師——「相手の心に慚愧の念を生じさせる」

マハームドラーを成就すると、怒りのエネルギーを操ることが自在になります。チッタカ正悟師も、ときには激しい怒りの相を現わされることがあります。それは、その魂に対する深い哀れみの心が背景にあるの



です。したがって、怒られた方もその瞬間に心が浄化されて、自然と慚愧の念が生じてくるといいます。

◎相手のためを思って怒ってくださる

わたしは、ワークの関係で正悟師によく怒られたことがあるのですが、正悟師は、怒るにしても、どこまでこの人は耐えられるかというのが、ある程度認識があって怒っているようなところがあります。

そして、ある程度時期を見て怒るというか、変なことをやってもすぐに怒るのではなく、その人の器とか精神面を見守りつつ、このまま放っておいたらこの人のためにならないとか、もうここを外すとこのワークが進まなくなるとかいったときにガツンと怒られるわけです。

しかし、正悟師の怒りには全然嫌悪を感じません。例えば相手に嫌悪があると、わたしの場合、体に来るというか、右の気道がピクピクしたりして後で非常に調子悪くなるのですが、正悟師に怒られると逆に調子が良くなるわけです。そして、「ああ、頑張らなくちゃならないな」という慚愧の念だけが出てきます。

はたから見ると、「ああ、怒られてるね」という表現になりますけれども、怒られてるわたしとしては、「これは怒られても仕方がない、ここで怒られなかったら、わたしのタマスが増大して現象を遅らせるだけだな」っていうのがわかるし、変な言い方をすれば、自分のために演技してくれているというか、わざとそういう状態を作り出して怒る作業をしているという、そんな感じで受け取れるわけです。

何に対しても全力でぶつかる
――「プライドを捨て、常に最前線に立たれる」

チッタカ正悟師は、常に極限の実践を自分自身に課

せられています。それは、正悟師のワークに対する姿勢の中に顕著に見ることができます。

正悟師を古くから知っていらっしゃるパヴィッタ師ほか、サマナ二人に、過去および現在の正悟師のワークぶりについて聞いてみました。

◎成就後も率先して第一線のワークをされる謙虚さ

わたしは、チッタカ正悟師とは、かつてＣＢＩ(建築班)で一緒だった経験がありますが、正悟師は、とにかくハードなワークでも文句一つ言わず、しかも頭陀に徹しながら黙々とワークされていました。

ＣＢＩというのは、リーダーがかなり下のサマナに厳しく当たっていたわけですけれども――これは、ワーク柄そうしなければならない部分もあったためですが――、正悟師もかなりカルマを落とされていて、それでもひたすら文句一つ言わず、雨の日も風の日もワークを続けていらっしゃいました。

そして、出家後わずか五カ月でクンダリニー・ヨーガの成就をされたわけですけれど、わたしは、それだけ極限のワークをされているお姿を目の当たりにしていましたので、「岡田さん(チッタカ正悟師の現世名)だったら成就して当然だろう」と思いました。

しかも、それだけ早く成就したら慢も出てきやすいものですが、そういったところも全く感じさせず、非常に謙虚でした。また、普通なら、成就をすればあえて肉体労働や人の嫌がるようなワークをしなくてもいいわけですけれども、チッタカ正悟師にはそういったプライドもなく、サマナの中に入って、サマナと同じように真っ黒になりながらひたすら不放逸にワークをされていました、そのお姿を見て本当にすごいお方だなと感銘を受けたものでした。

この、ワークに対する非常に謙虚な姿勢は、正悟師になられてからも変わっておらず、例えば、光音天の

改装のときにも、自ら率先して畳を運ばれたりだとか、そういったことがあったようです。

（パヴィッタ師）

◎皆が嫌がるワークは、ご自分が担当された

チッタカ正悟師は、CBIのときにも人の嫌がることを率先してなされていたようです。

そのころの上九時代のCBIでは、その日その日の仕事の分担が書かれていて、サマナは、「わたしは今日はこれを担当します」「わたしは今日はこれやります」というふうにみんなで決めていったのだそうです。

しかしチッタカ正悟師はいつも最後まで待って、一番最後に残った、みんなが一番やりたくない仕事を担当されていたというのです。

また、「これをやってください」と言われたことは、絶対に嫌がらずにやったということでした。正悟師ご自身、「それはすごくつらかったし、すごく大変だったけれど、歯を食いしばってやった」とおっしゃっていました。かなりつらかった仕事だったようです。

◎できるだけいいものを提供しようという心遣い

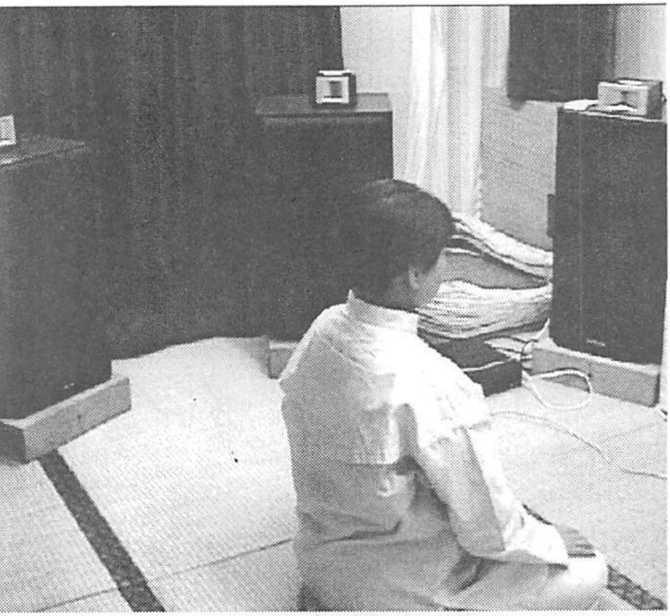
正悟師は、いろいろなイニシエーションの開発に携わっていらっしゃいますが、単にできたものをチェックするだけではなくて、とても研究熱心な側面をお持ちです。

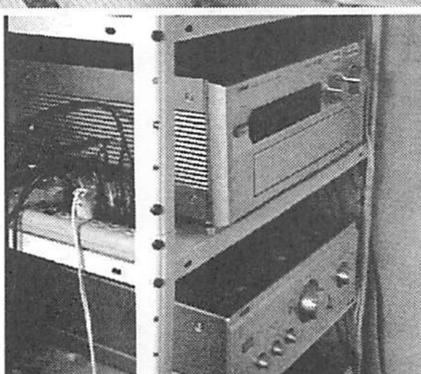
例えば、スーパー甘露水の効果をより良くしようとされて、水を「単分子水」といわれる状態にするフィルターを通して、より強力に浄化されるようにしようとか、あるセラミックみたいなものを水に浸けておくと他の成分が出ていいとか……。そのように、単純に水を修法して甘露水にするだけにとどまらず、より効果が出る形に改良しようとされるわけです。

また、わたしたちにはまだわからない世界ですが、

正悟師は、「この甘露水はアナハタが浄化される」「これはマニプーラが浄化される」とか、そういう霊的に敏感な部分でしっかり検討され、判断されているのです。

そのほか、サマナに与えられるイニシエーションにしても、不具合があったらすぐに修理しようとか交換しようとされます。その辺りの細かい心遣いは、本当に正悟師の慈愛の現われにほかならず、お手伝いをしているわたしたちサマナにとっても気が引き締まる思いがしたものです。





正悟師が研究・開発に携われた「ピラミッド・イニシエーション」



チッタカ正悟師、その偉大な軌跡を追って
――苦しみのどん底から光の道へ

多くの師・サマナから敬愛されているチッタカ正悟師――。以上見てきたように、その神秘力もさることながら、すべての魂に対する慈愛の深さにも卓越したものがあります。

チッタカ正悟師がお持ちになっている、ずば抜けた救済者としての資質は、もちろん一朝一夕に培うことができたものではありません。その裏には、長年にわたる苦しみの中での、血のにじむような努力の積み重ねがあったのです。

ここでは、チッタカ正悟師の偉大な人生のうち、苦しみの現世から真理に出合い、信徒となって心に光を取り戻していくまでを、正悟師のインタビューをもとに振り返ってみることにしましょう。

◆おとなしき幼少期、剣の道へ

チッタカ正悟師は、子供のころは引っ込み思案で、大変おとなしい性格だったといいます。あまりにもおとなしすぎたために親の心配を買い、勧められるままに剣道を始めたそうです。正悟師は、小学校三年生から高校を卒業するまでの九年間、町の武道館通いや学校での部活動を通して、剣の道の研鑽に励んだのです。

（正悟師）剣道というスポーツは楽しくないんですね。まさに苦行というか。そういう意味においては、一つ

の修行をしているというような認識がありましたね。

——途中でやめたいと思われたことはありましたか？

（正悟師） やめたいというか、きついという感じでしたね。肉体的にもきついし、精神的にも先輩のいじめとかありましたから。

でもいったん始めてしまうと、わたしは生真面目なところがあって、やめたくてもやめられないんですね。やめると逃げになってしまうと思っていました。ですから、学校が終わるまで続けざるを得なかったんです。

剣道によって、正悟師は心身共にかなり鍛えられたようです。その厳しさの中にあっても途中で投げ出さない真面目さ・忍辱の姿勢は、後々、修行の道でも大いに生かされることになります。

◆超能力へのあこがれ

剣道の修練に励まれていたチッタカ正悟師でしたが、それと並行して、全く別の分野に対する好奇心がわいてくるのを抑えられずにいました。それが超常現象に対する興味だったのです。

小学校高学年のころ、正悟師は、異次元の世界や超能力にあこがれ、子供ながらに、未知なる能力の発現を試みるようになっていきます。

——具体的には、どんなことをされていたのですか？

（正悟師） いろいろな超能力実験や超能力トレーニングをやっていました。例えば、サイコロを転がして、思った目を出す訓練とか、あるいは透視カードを当てるとか。そういうのがちまたではやっていたんです

ね。あるいは、心霊写真を撮ろうと思って墓場に行ったりとか。何とかして不思議な体験ができないかと、いろいろと研究していましたね。

そして、ちょうどそのころくらいから、ちょっとした神秘的な体験が始まってきたという感じですね。

その後、正悟師の興味は、神秘的なものから、修行の道への第一歩とも言える精神世界への探究へと移行していきました。一般の日本仏教の書籍をはじめ、いろいろな宗教書にも当たっていったといいます。

こうした精神世界への強い関心は、後にプロのアニメーターとして人生を歩む決心をしたあとも、ずっと続くことになります。

◆魔境・思わぬ落とし穴

（正悟師） 高校二年のときでしたでしょうか。宮崎駿の『未来少年コナン』というアニメにすごく感動しまして、進学校だったんですが、結局大学に行かずにアニメーションの専門学校に入りました。

ですから高校卒業後は、アニメーターの勉強をしながら、さらに精神世界の本を読みあさって、そちら側でも楽しんでいましたね。

アニメーターを生涯の職業に選んだ正悟師。仕事の方もいくつか手掛けながら、プロを目指して順調な滑り出しを見せていました。

しかし、最も関心を寄せていた精神世界で〝思わぬ落とし穴〟が待ち受けていようとは、この時点では思ってもみなかったでしょう。

十九歳になって、正悟師はある宗教に出合い、どんどんのめり込んでいくことになります。そこでは確かに霊的な体験は進んだものの、心の成熟を置き去りにした教義ゆえに、その団体の正しくないデータに巻き

込まれ、精神的に不安定な状態に陥り、思わぬ辛酸をなめる結果になってしまいます。

——その宗教ではどういった修行をされていたのですか？

（正悟師）特殊な瞑想や呼吸法で、一気に深い意識に突っ込んでいくということをやっていました。

——その修行によって、精神が不安定な状態に……。

（正悟師）そうです。これが、失敗だったんですよ。ここで精神が錯乱状態になり、大魔境に陥って、はたから見て言動がおかしくなってしまいました。そして、そのまま強制的に入院させられてしまったんです。

入院中も、正悟師の行動は異常を極めていました。潜在意識に渦巻くけがれたデータは止めようもなく、ストレートな形で次々と現象化していったのです。

そして半年後に退院。その後、家業である鉄工所の手伝いをしながら送った六年間は、正悟師にとっても最もつらい、まさに極限の精神状態だったそうです。

（正悟師）病院から出てきたときには、すっかり鬱状態になっていましたね。その後何年もの間、大変な精神的落ち込みを来してしまって、何に対しても希望が持てなくて、もう自殺の修習しかしていませんでした。

それが潜在意識に根付いてしまって、無意識のうちに車が来ると飛び込みたくなったり、高い所へ上がると飛び降りたくなるんです。病気だから仕方がないけれど、本当に絶望すると、人間ってそういう感じになるんですね。

あまりにも激しい自殺衝動に襲われるため、正悟師はわざわざ〝生きる屍〟に徹したといいます。つまり、心を閉ざし、感情を押し殺して、身をすくめながら生き続けたのです。

表層意識を落として潜在意識や超潜在意識へと入っていくプロセスは、修行者であればだれもが通っていかなければならない道です。そのため、この煩悩多き世界においては、前生における修行者は、深い意識に入る道筋ができているがためにかえって自己のけがれがストレートに現われやすく、周りの人たちの無理解も手伝って、大変つらい状況になってしまうことがよくあります。

チッタカ正悟師は、特に深い意識に入る能力に長けていたため、その現象が顕著に現われ出ました。正しくない宗教によって心をけがし、功徳を消耗させてしまった分、その苦しみは壮絶さを極めたのです。

潜在意識の自殺衝動をかろうじて表層意識が食い止



めるという、ぎりぎりの人生を歩み続ける正悟師――。絶望の淵に立たされた状態で、真理に出合う二十五歳まで、まさに〝何とか生きながらえた〟のでした。

◆絶望の淵から真理の流れへ

苦しみの日々を送っていた正悟師ですが、なおも精神世界に対する興味は尽きることがなかったようです。書店に行っては宗教書を探す毎日を送り、そろそろカルマが落ちて心が明るさを取り戻し始めたころ、ついに『超能力秘密の開発法』、『マハーヤーナ』、『イニシエーション』といった書籍に触れる機会に恵まれたのです。

(正悟師)わたしが初めて読んだのは、『超能力秘密の開発法』でした。その中で「どんなにみじめな状態になっても、捨て鉢にならずにひたすら努力を続ける」という言葉が載っていたのです。それを目にしたとき、まさにハッと胸を突かれる思いがしました。その言葉の上に、自分の体験がそのまま重なったのです。

わたしにしてみれば、それまでひたすら身をすくめて〝生きる屍〟に徹したのも、苦しみの中で自分を見失わないようにするための一つの努力だったんです。

「これはひょっとしたら本物かもしれない」――。押さえ切れない興味と欲求にかられ、早速入信申込書を取り寄せたものの、過去の誤った修行による心の傷が、正悟師を躊躇させていました。本格的な修行の道に入ることは、まだまだ勇気のいることでした。

――すぐには入信されなかったのですか?

(正悟師)ええ、書籍に書かれている内容にはすごく



興味を惹かれていたのですが、前の宗教とイメージがダブってしまって、恐怖がありました。しかも修行も厳しそうだし、怖いなと思ってちょっと控えてたんですね。

しかし、入信申込書が届いた夜、夢の中でシヴァ大神からいろいろと示唆を受けたんです。そのときは声によるメッセージでしたが、それがあって飛び起きて、「あっ、これはいけない。入信しなくちゃ」と思って、すぐに申込書を書いて出してしまいました。

暗黒の中を貫く一筋の光明に、やっとのことでたどり着いたチッタカ正悟師。長きにわたる絶望の人生に別れを告げ、ここにようやく真理の本流へと入ることができたのです。一九八八年七月のことでした。

当時、教団には、修行の目的に合わせて三つのコースがありましたが、まだ厳しい修行に対する抵抗感が強かったためか、正悟師が選択したのは最も楽なコースでした。

(正悟師) 入信したときは、あまり厳しい修行は嫌だということで、実はコースの中で一番楽なコースを選んだわけですよね。これは、基本的には月に一回会合に出ればいいというだけのコースで、「これだったらできるだろう」ということで始めたわけです。プログラムに沿って一日三十分程度の簡単な瞑想を行なって、あとは随時、布施をしたりバクティをしたりという形なんですけれど。

わたしの家が群馬で、道場は東京にありましたから、あまりバクティに通うということもせず、会合に出る以外は家で三十分程度瞑想していただけですね。

しかし、それでも生来の霊性の高さゆえ、次から次へと、経典にのっとった神秘体験が正悟師の身に起こり始めたのです。

（正悟師） 簡単な瞑想をやりながらでも、すごくいろいろと変化がありました。例えば、瞑想でマントラを唱えたりするわけですけれど、それだけですごくエネルギーの上昇を感じたりとか、冷たい甘露みたいなものが落ちるとか。

さらに、瞑想中にいろいろな色が見えたりしましたね。最初、風元素だと思うのですが、緑の輪っかが近づいたり遠のいたりして、そしてそれが青くなったり、あるいは紫になったりとか……。そういうことをクンバカ中に頻繁に経験しましたね。

そういうかなり修行上の手応えがあって、だんだん本気になっていったという感じなんです。

そして、ぜひ「解脱特別修法」のプルシャを受けたいと思って、早速その伝授を受けました。そしてそれをアナハタ・チァクラのところに付けていたのですが、ある日、解脱とか救済について思いをはせていたら、急にアナハタ・チァクラのところが「スーッ」として、浄化されていくような感じがありました。

そしてその晩、自宅で瞑想をしていると、いきなり体が跳ね出してダルドリー・シッディが起きてしまったんです。本当にそれまで一日三十分程度の瞑想をしてただけなのに……。そういったことが立て続けにありましたね。

◆功徳を積むことが喜びに

正悟師はこのころから、バクティを中心に〝功徳を積むこと〟を始められました。当時も、教団では「功徳」の実践が奨励されていたわけですが、正悟師には、新興宗教にしては「功徳」や「奉仕」といった大変古めかしい言葉が使われているのが、逆に新鮮に感じられたそうです。そして、バクティに限りない魅力を感じたといいます。

それは、それまでご自身が経験した魔境の体験が、

功徳の消耗により、低位のけがれたアストラル（潜在意識）に突っ込むことによって生じたものであることが、教学をするにつれて理解できたというのも一つの要因でした。

そうした背景もあって、チラシ配りのバクティの機会が与えられたとき、正悟師は、水を得た魚のように喜び勇んで没頭し続けたそうです。

――どのような感じでバクティをされていたのですか？

（正悟師） まずは道場からチラシを一万枚送っていただいて、毎朝三時ごろから七時過ぎまで、猛然と配っていましたね。冬になっても、吹きすさぶ寒風も何のそので、ほとんど毎朝四、五時間は配り続けました。寒い方がかえって修行が進むということで、妙にうれしかったことも覚えています。終わると、たいていボーっとして、言葉では言い表わせないほど気持ちが良かったですね。

一枚配るたびにエゴがつぶれていくような感じがして、配りながら痛くもないのに肩の骨がボキボキと恐ろしい音を立てました。そのときは阿修羅のカルマが落ちていたのではないかと思います。

布施やバクティはアンチ・エゴの行為ですので、行なうと心が喜ぶんですね。

瞑想修行による霊的体験、そして功徳を積むことから来る心の解放感――。修行の成果が体感できるにつれ、真理に対する確信が正悟師の中でどんどん強まっていきました。そして、今までとは見違えるように真理の実践に打ち込むようになっていったのです。

（正悟師） もうこのころになると、結果がどんどん出てくるので面白くてたまらないっていう感じでした

ね。だから、もう周りから引っ張られてやるという感じではなくて、修行もバクティも自発的に行なっていました。

毎日仕事もしつつ、なおかつ群馬から東京に通いつつですから、ほとんど寝てる暇がないんです。それでも、うれしくてやっていましたね。

やがて正悟師の関心は、当時の教団最大のイニシエーションの一つである、シャクティーパットへと注がれることになりました。

◆シャクティーパット、そして出家

その後、正悟師は、シャクティーパットを受けるために思い切ってコース変更を行ない、より厳しい修行へとご自分を追い込んでいきました。引き続きチラシ配りのバクティで大いなる功徳を積み、ほとんど道場に入り浸りで、家にも帰らないという状態が続いたそうです。

そして、ついにその日を迎えることになったのです。

――シャクティーパットのときの体験を教えていただけますか？

〔正悟師〕高弟の方がわたしの眉間に手を触れられるわけですが、その途端、額のところに白銀の光が見え始めて、それが指の動きに沿って一緒にグルグル回っていました。

最初はそういった状態が続いたのですが、そのうちに赤とか青とか紫とか、そういういろいろな色が入り交じって、マンダラみたいになって、自分の方にパァーっと近づいてきたりとかして。そういう感じでシャクティーパットが終わりました。

このときのシャクティーパットが、正悟師の運命に大きく影響を与えたことは疑いありません。その証に、それまで正悟師の心になかった「出家」の二文字が、この後急速に持ち上がってくることになったのです。

（正悟師）自分では「在家で成就しよう」と思っていて、出家なんか全然考えていなかったわけです。しかし、シャクティーパット後間もなくして、高弟の方から「どうですか、そろそろ出家は」と言われたとき、不思議と「これは出家しないといけないのかなあ」と思い始めてしまいました。

「とにかく成就するんだったら、出家が一番早いから」と勧められたわけですね。で、「そうか、じゃあ出家した方がいいのかなあ」とだんだん思い出して、「じゃあわかりました。出家します」とその場で言ってしまったんです。

シャクティーパットによって、カルマが大きく変わったんだと思います。

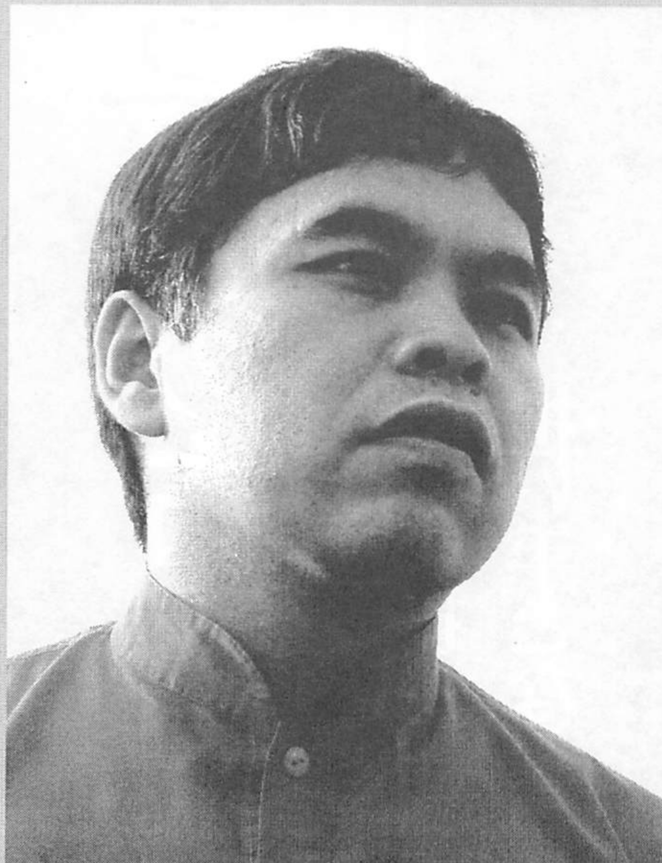
現世にいらっしゃったころから、極限の苦しみの中で人生を歩んでこられたチッタカ正悟師——。

そうした逆境の中で、修行に対する確信、どんな苦しみに遭っても耐え続けるという忍辱、そしてすべての苦しめる魂に対する深い慈愛と哀れみが、徐々に正悟師の心の奥深いところで芽生えていったのでしょう。

一九八九年六月——。約一年にわたる信徒生活を終え、いよいよ本格的な魂の変革、魂の進化を目標とした正悟師の出家生活が、ここに始まることになったのです。

◇　◇　◇

その後の経緯については、次号で詳しくご紹介します。どうぞご期待ください。



特集2

真理の布施

――アクエリアス新時代の担い手となるために

布施は、わたしたちが修行を進める上で最も土台となる実践です。
布施にはいろいろなメリットがありますが、アクエリアスの時代を目前に控えた現代においては、さらに重要な意味合いを持っています。
特集２では、アクエリアス新時代と布施の関係について取り上げることにします。



この布施には三つあって、財施・安心施・法施と。この財施・安心施・法施というのは、それぞれどんなふうになっているかというと、まず物質的なもの、これを自分だけで独占せずに、他に与えようというのが財施です。特に、真理の教えを流布している者にお布施をしようということです。で、これは、この実践ができない人というのは、二十一世紀の社会を担うことはできないだろうし、また、そのカルマによって、来世餓鬼の世界へ生まれ変わってしまうだろうと。

日本が、または世界が、今、餓鬼の世界を形成しています。これを変えていくためには、この財施の実践というのは非常に重要だと。もちろん、来世、高い世界へ行くためにもこの財施の実践は必要だと。

ですから、皆さんがアクエリアスの時代の担い手になるためにも、そして高い世界へ来世生まれ変わるためにも、物質を自己に集中させ他に分け与えないという、このカルマを捨断する。そしてこのカルマの捨断する具体的な実践として、財施の実践というのがあります。

で、皆さんに一つ考えていただきたいのは、お布施の実践をすると、日本の平均的な消費水準よりもずっと下になるかもしれない。しかし、それでも東南アジアの人たちに比べると王侯貴族の生活なんです。日本の貧民層は、だいたいアメリカの下六割の消費水準と同じです。アメリカの下の人たちは、みんな貧しいですから。

で、その人たちでも、東南アジアに行くと王侯貴族で、今攻撃を受けようとしているアフガニスタンとかイスラム教国に行くと、王侯貴族のさらに上になっちゃうんです。

だから、わたしたちがこの地球に生まれてきて、そしてすべての人のことを考えるという視点

から立っても、または、日本というものに生まれてきて、感覚が麻痺して、どんどんどん貪りを増大するということを捨断するという意味からしても、その財施の実践というのを、皆さんが教団に対してなすということは、非常にいいことだと思います。

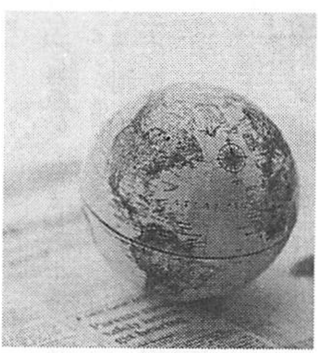
今までこういった視点からはあまり法則を説かなかったわけですが、二つの視点があるわけですね。サキャ神賢が説いた伝統的な財施の意味、それからもう一つは二十一世紀、アクエリアスの時代において、地球人としてどういった実践をなしていかなきゃいけないかという意味からの財施、または慈善というもの、これを考えていただきたいと思います。

これは、九月三十日に、マイトレーヤ元正大師が東京・烏山にて、東京の信徒さんを対象にした説法会でお話しになったものです。

ここでは、布施に対する二つの意味合いが説かれています。一つは古典的な布施の意味合い、そしてもう一つはアクエリアスの時代を担う人材となるための実践としての布施です。

このうち、古典的な布施の意味合いについては、今後、本誌の『幸福を呼ぶ「真理の布施」』のコーナーで、逐一取り上げていくことにします。

ここでは、後者の、アクエリアス新時代を担う人材となるための実践としての布施にスポットを当てて、考えていきたいと思います。



人間界の堕落は、布施の心の喪失から始まった

皆さんもご存じのとおり、宇宙の第二の創造において、光音天に住んでいた魂が次々と落下し、神聖天・天界・阿修羅界・人間界……といった世界が創られていきました。

その当時の人間界の模様が仏典『転輪獅子吼経』の中に描かれているわけですが、それによると、「転輪聖王」と呼ばれる王様が、功徳と真理の法則を背景として全世界を幸福に統治していたことがうたわれています。

そのころの人間は、自ら進んで布施をし戒を守っていました。そのため、心は豊かで平穏であり、疲弊することがないために八万歳という長寿を誇っていました。すべての民に繁栄が約束され、現在知られるような悪業とは全く無縁の、望ましい生活を送ることができた時代だったのです。

そして、その転輪聖王の統治が七代続いたあと、八代目に立つはずの息子が、代々受け継がれてきた「聖なる転輪王の儀式（※コラム参照）」を継承することを怠ったがために、その息子の時代から徐々に人間界に悪法がはびこるようになっていったのです。

その発端となったのは、その王（息子）が財産のない者に財産を与えなくなったことでした。そのために貧民が増大し、やがて、貧しさのあまり盗みを働く者が現われ始めました。そして、民衆の間に多くの盗みが広がり、そしてそれを罰するための武器の発生、さらに殺害・殺生へとエスカレートしていき、多くの悪法が蔓延するようになりました。

また、悪業の蓄積によって人間の寿命はどんどんと短くなり、最終的には今のように、長寿といってもわずか百歳程度しか生きられなくなってしまったのです。

C O L U M N

転輪聖王の統治の真髄
――「聖なる転輪王の儀式」

『転輪獅子吼経』によると、転輪聖王は、次のような「聖なる転輪王の儀式」を親から子、子から孫へと受け継いでいました。この儀式はまさに、転輪聖王の統治の真髄とも言うべきものです。

「法を尊敬の念をもって扱い、考慮し、畏怖の念をもって崇め、賛美し、崇拝し、法の旗となり、法を輝きとし、最上の規則とし、法にのっとった守護と防衛と保護をし、身内・軍団・武人・家臣・祭司と後援者・国民と地方人・出家修行者と祭司・獣や鳥を管理しなさい。

そして、王国において、非法の行為を発生させてはならない。もし財産のない者があれば、彼らに財宝を施しなさい。

また、王国において、出家修行者や祭司たちが、官能的不節制や放逸さを自制し、忍辱や親切を定着させ、真我に調御させ、真我に合一し、真我に完全煩悩破壊させたならば、絶えずその者を訪れて、こう尋ねなさい。『尊者よ、善とは何であり、不善とは何なのでしょうか。とがめることとは何であり、とがめざるべきこととは何なのでしょうか。依存するものとは何であり、依存してはならないものとは何なのでしょうか。わたしがなしている長い間不利益である苦しみとは何であり、またわたしがなしている長い間利益である楽とは何なのでしょうか』と。

そして、その答えを聞いたならば、不善であることを取り除き、善を記憶実践し続けなければならない。

我が子よ、これこそが聖なる転輪王の儀式なのである」

この内容から、転輪聖王が安寧（あんねい）に世界を統治できたのは、背景に、真理の法則に対する確固とした帰依があったことが伺えます。そして、この伝統の儀式が途絶えたがために、人間界に多くの悪がはびこることになったのです。

現代にも当てはまる仏典の教訓

この、統治者の心の中から「布施の心」が消えたがために多くの問題が発生したという構図は、今の社会にもそのまま当てはまるのではないでしょうか。

今年九月十一日に起きたアメリカ同時多発テロは、世界的に力を持つ先進国の貪りによってもたらされた、南北の激しい貧富の格差に対する途上国（ここではイスラム社会）の反発が大きな原因になっている、と指摘する人もいます。

このように自他の区別を背景として、自分の生活の快適さのみを貪り続ける先進国の人たちの心に、本当の意味で布施の心がよみがえらない限り、「転輪聖王」が統治していたような至福の時代は決して訪れることはないと言えるでしょう。

そして、こうした世界的・構造的な矛盾を抱えたままでは、貧しい人たちの不満が増大する一方であることは目に見えています。

したがって、わたしたち一人ひとりが布施の心を培い、その心の波動を世界に広げていくことは、仏典にうたわれているかつての「理想郷」を取り戻す上で、欠かすことのできない実践だと言うことができるでしょう。

餓鬼の世界を形成する地球

冒頭のマイトレーヤ元正大師のご説法にもあるとおり、現在の地球は、まさに「餓鬼の世界」を形成していると言っても過言ではありません。

餓鬼のカルマは、途上国の人たちには貧困から来る飢餓[※1]の苦しみとなって現われ、先進国の人たちには、

（※1）飢餓：基礎代謝量の1.55割り増し以下の栄養しか摂取できない状態で、これは、人間が健康さえも維持できない活動水準のカロリー摂取水準であるとされている。

飽食・過食から来る肥満や心臓病、糖尿病、その他食りの心がもたらす癌といった病気として現われています。

これらの弊害は、いわゆる「南北問題」と呼ばれており、世界の富の配分が大きく偏っていることに起因しています。

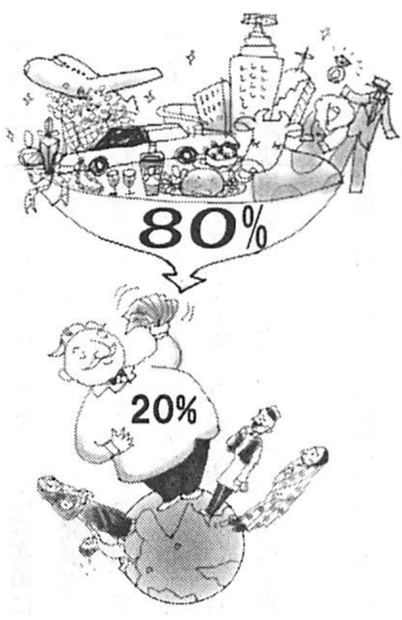
世界の富がどのようなかたちで分配されているか考えてみましょう。

世界の人たちを、最も豊かな人から最も貧しい人まで二〇%ずつ五つのクラスに分け、それぞれのクラスごとにどのくらい富の分配が行われているかをみてみますと、非常に著しい南北間格差があることがわかります。

世界のGNPの八〇%くらいは、最も豊かなクラスが占めています。それに対して最も貧しいクラスは、世界全体のGNPのわずか一・四%しか占めていません。

世界貿易でみても、最も豊かなクラスが世界貿易全体の八四%を占めており、最も貧しいクラスの占有率は一%にも満たないのです。

（JAグループ環境推進協議会編
『食糧と地球環境』）



◈飢餓に苦しむ途上国の人たち――食糧の南北問題

先述したように、世界の富の大半は、アメリカやヨーロッパ、日本といった先進国に集中しています。そしてこの南北間格差は、世界の穀物市場にも大きな影響を与えており、いわゆる「食糧の南北問題」といわれる深刻な事態を引き起こしています。

> 食糧の地球上での分配は高所得市場経済諸国が集中する世界の北で過剰状態にあり、低所得発展途上諸国が集中する世界の南と旧東欧ソ連社会主義諸国では不足している。高所得市場経済諸国では過食による肥満と心臓病等が重要な問題になり、発展途上諸国では八億人ほどの飢餓人口が存在する。地球上で過剰と不足が並存し、これが食糧の南北問題である。
>
> （辻井博『世界の食糧不安と日本農業』）

飢餓人口は、ここ数十年で、全世界的には次第に減ってきていますが、アフリカを中心とした発展途上国では急増してきています。しかも、この地域は、食糧生産が人口増加に追い付かないために生じる「マルサス的危機」と呼ばれる形態の食糧危機に瀕しており、その解決策は今のところ見つかっていないのが現状です。

このような食糧の南北間格差の問題を、京都大学教授の辻井博氏は次のように指摘しています。

> 南の食糧不足と北の過剰という食糧の南北問題は、……一面は分配問題である。しかし、この分配問題は世界の人々の現在の価値観と国家の存在を前提とすれば根本的解決は不可能である。



このように、食糧の南北問題は、国家間の分配問題に大きな原因があることが指摘されており、これは言い換えれば、裕福な国々が貪りの心に支配され、貧しい国に対して十分な布施を行なっていないがゆえに起きている現象とも言えるのです。

◈癌や肥満に苦しむ先進国の人たち

一方、裕福とされている先進国の人たちにも、餓鬼のカルマが顕著に現われてきています。その一つが癌です。

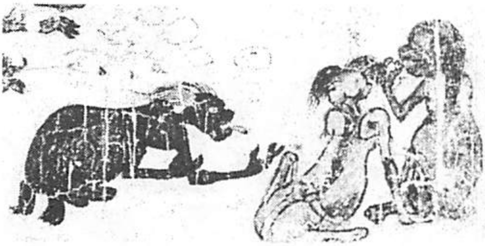
以下に、我が国の現状を見てみることにしましょう。

厚生労働省の「平成十二年人口動態統計月報年計（概数）の概況」によると、日本の平成十二年の死因順位は、第一位が悪性新生物（癌）で、全死亡者の三〇・七％を占めました。つまり、全死亡者のほぼ三人

に一人は癌で死亡しているのです。

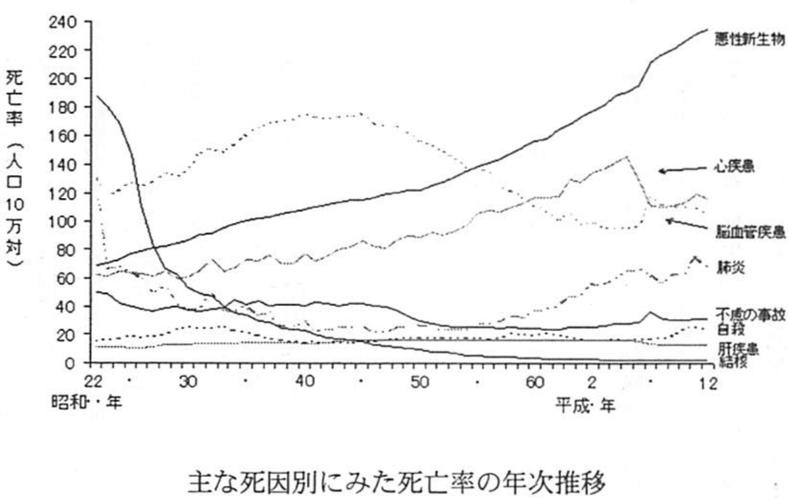
しかも、死亡率の年次推移を見ても、癌は、昭和五十六年に死因の一位になって以来二十年間、一貫して上昇を続けています。

そして、第二位が心疾患で、全死亡者に占める割合は一五・二%、そして第三位が脳血管疾患で、全体の一三・八%を占めています。



死因	死亡数
（全死因）	961637
1．悪性新生物	295399（30.7%）
2．心疾患	146633（15.2%）
3．脳血管疾患	132489（13.8%）

※平成12年人口動態統計月報年計（概数）の概況



主な死因別にみた死亡率の年次推移

癌は、餓鬼のカルマの典型です。したがって、現代の日本人がいかに一生をかけて貪りの心を修習し、身において力ルマを蓄積し、その果報として、癌にかかって死に至る結果になっているかがよくおわかりでしょう。

また、飽食の弊害の一つとして「肥満」の増加も挙げられます。平成十年十月一日時点での推測される肥満者の数は、男性で千三百万人、女性で一千万人と見られています。

ここ二十年間の肥満者の割合の年次推移によると、女性はほぼ横ばいですが、男性の十五歳から四十歳までが約二倍に増えています（平成元年と比較しても一・三倍になっている）。

「わたしは特に貪った覚えはない」と考えられる方もいらっしゃるでしょう。しかし、世界レベルで見た場合、貧困層を踏み台にして豊かさを得ている先進国に生活している限り、日本人として普通に生きるだけでも、知らず知らずのうちに物質に対するとらわれが増大し、貪りの心を強めてしまうという、恐ろしい結果になってしまっているのが現状です。

もちろん、こうした肥満や癌などの貪りの心がもたらす様々な問題は、日本だけでなく、先進国共通の問題になっていることは言うまでもありません。

布施の実践で、新時代を担うカルマをつくろう

◈価値観を転換し、破滅の回避を

以上見てきたものは、地球上に現われ出た餓鬼のカルマの現象にすぎません。しかし、輪廻転生によって至る〝本物の餓鬼の世界〟は、人間界で見られる餓鬼のカルマの苦しみとは比較になりません。それは、多

くの仏典や説法、それに成就者の瞑想体験にも見られるとおりです。

したがって、わたしたち自身も、この日本という先進国で流されて生きていく限り、その先には破滅が待っているということになってしまいます。

その破滅が、今生で癌という形で現われるのか、あるいは来世、本物の餓鬼の世界へと落ちていくことになるのかはわかりません。それは、その人が今生で積んだ貪りのカルマの大きさによります。

今は、末法の世といわれています。この「末法の世」とは、ものの考え方が転倒してしまった世の中のことです。それは例えば、供養（＝布施）をしてはいけないものに供養し、供養をしなければならないものに対して供養しない、あるいは、救済しなければならないものを救済しない世の中なのです。

わたしたちが、破滅の道から脱却するためには、今まで従ってきた〝煩悩を満足させる価値観〟ではなく、〝真理を背景とした煩悩破壊の価値観〟に、自分を合わせていくことが大切になってきます。

そして、その実践の土台となるものが「布施」なのです。

◈布施は魂の最高の防御法

では、どうして布施がわたしたちの破滅を救うのでしょうか——。ここでは、布施に秘められた二つのメリットについてご紹介しましょう。

まず第一に、布施には功徳を積むという意味合いがあります。

皆さんもおわかりでしょうが、現在の世界情勢を見ても、これからどんな時代になるかわかりません。したがって、現実世界における備えも大切ですが、それ以上に大切になってくるのは死に対する準備です。

アメリカの同時多発テロを見ても、カルマが解放さ

れるときは一瞬です。わたしたちは、いつこのような事件や事故に巻き込まれて、不幸にも命を落としてしまうかもしれません。本人が自覚しないまま死を迎えることも、珍しくない世の中なのです。

　したがって、いつ死を迎えてもいいように、功徳を積む機会が与えられているうちに布施を行ない、高い世界への転生の準備をしておくことは、非常に重要です。

　魂にとっての最高の備え、あるいは最高の防御法、それは功徳を積むこと以外にはないということをしっかりと押さえておきましょう。









◈布施の心は、正法の時代をもたらす

アクエリアスの時代——それは、わたしたち修行者にとっても、そして世界のすべての人々にとっても、強く待ち望まれるものです。なぜなら「アクエリアス（水瓶座）」の象意にもあるように、その時代が、多くの魂が解脱を目指して邁進する〝正法の時代〟だから

COLUMN

富の喜びを味わえずに死んでいく人たち

先進国という裕福な国々に住んでいながらも、その裕福さの恩恵を十分に味わうことができない人たちが大勢いるのではないでしょうか。例えば、ただひたすら物を買い込み、ため込み、使うことがない（あるいは使うことができない）状態に陥っている人たちです。

その典型的な例が貯蓄です。特に「将来に何かあったときのために」という不安を背景に財をため込んでいる人は、その不安ゆえにそれを使うことができないのが通常です。そして、結局は、その財から来る喜びをこの人生において味わうことなく死に至ってしまうことになります。

仏教では、そのようにしてこの世に残された財、その人が使うことができなかった財を「不安を背景とした貪り」として見ます。つまり、その人の餓鬼のカルマの現われと見るわけです。

したがって仏教には、「自分のところに財をため置かないで、できるだけ流しなさい」という教えが存在しています。それも、他を利する財の使い方が最高であることは言うまでもありません。

皆さんは今現在、どれほどの財を持っているでしょうか？

将来に何かあったときのために「財をため込んでおく」という考え方から、将来に何かあったときのために「功徳を積む」という考え方に、できるだけ早く転換していただきたいものです。——なぜなら、死はいつやってくるかもしれないからです。

です。逆を言えば、多くの魂が救済されていく時代とも言うことができます。

そして、このアクエリアスの時代を到来させるための〝呼び水〟となるのが、わたしたち一人ひとりの布施の心なのです。

現在の地球は餓鬼のカルマに覆われています。やがてこの餓鬼のカルマはいろいろな形で解放されていくことになるでしょう。もし、このままの状態で人類が進んでいくとするなら、その解放のされ方は悲惨なものになってしまうのは避けられません。

しかしここで、地球上のたとえ一部の人たちであったとしても、布施の心を培うことができるなら、その心の波動は、この地上に蔓延している餓鬼のカルマを多少なりとも薄める形になります。そしてその分、カルマの解放は緩やかかつ速やかなものとなり、スムーズに次の至福の時代へと移行することが可能になるのです。当然、その過程で人類が経験する苦しみの量も少なくて済む、ということは言うまでもありません。

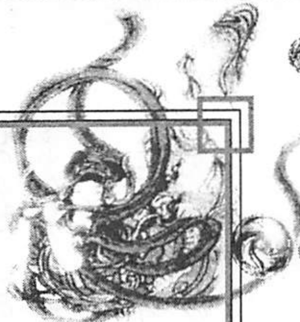
そしてこれが、布施に秘められた第二のメリットです。

今こそ自己のカルマと地球のカルマの浄化を思念しながら、ぜひとも布施の実践に邁進していただきたいと思います。それによってわたしたちは、普通に布施をするとき以上の功徳、そして心の成熟を得ることができるのです。

◇　◇　◇

最後にマイトレーヤ元正大師の言葉をご紹介して、この特集と締めくくりとしたいと思います。

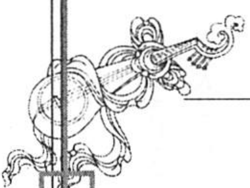
この財施には、皆さんにおいて非常に重要な救済上の使命があるんだと。単に個人的な実践ではなくて、社会救済上の使命、価値があるんだということも理解していただきたい。



天女のしらべ

アストラル音楽は人間世界を超えて

◈タントラジェーンティー師◈



潜在意識を一変させる音楽の力

歌は世につれ世は歌につれ……という言葉もあるように、音楽や歌というものは、その時代時代の人々の心を表現する手段として長年使われてきました。

バロック音楽などを聴くと、何か異国の調度品に囲まれた貴族のような気分になったり、かと思えば、ハードロックが流れるとちょっとすさんだ不良っぽい気分になったりと、流れている音楽によって気分も変わってしまいますよね。また、昔流行った歌謡曲などを聴くとそのころのことを思い出す、というようなことは、皆さんよく経験されていることと思います。

そういった経験からもわかる通り、音楽というものは、その音楽が流れていた時代や、作曲した人の



心の世界、あるいはその曲を聴いていたころの自分の世界に、心を乗せて連れていく、という効果があることがわかります。

では、なぜ音楽が人の心にそこまで影響を与えることができるのでしょうか。それは、アストラル世界は音（ヴァイブレーション）とイメージから構成されていますから、音がその人のアストラル（潜在意識）にダイレクトに届き、その世界を変えてしまうからなのです。

そんな音楽の持っている力をフルに活用し、聞く人の心を高い世界へと連れていってくれるのが、「アストラル音楽」です。

アストラル音楽が〝進化〟の一端を担う

アストラル音楽は、修行によって高い世界を経験できるようになった成就者が、瞑想によってその世界に

流れている音楽を聴き、そのメロディーを書き留めたものを組み合わせて作られています。

アストラル音楽を聴いた人が口をそろえて、

「心が安らぎ、癒された」

「緊張が取れてリラックスした」

「心が明るく、軽くなった」

「至福感にひたった」

「なぜか懐かしくて涙が出た」

などの感想を持つのはそのためです。

だれでも高い世界、かつて幸福であった神々の世界にいたころの経験のデータというのは持っていますから、その記憶が呼び覚まされ、高い世界、神々の意識にいざなわれるのですね。

また、心が軽くなるのは、高い世界のヴァイブレーションを含むアストラル音楽を聴くことによって、体内に固定されていたエネルギーが自然に振動を始め、熱を発生しながら上昇して、低い世界の苦しみ、悩みのデータを浄化して洗い流してくれるからなのです。

アストラル音楽を聴いただけでクンダリニーが覚醒した、という人が何十人もいるということを考えても、このアストラル音楽が、本当に人間の世界を超えた世界のヴァイブレーションであることがわかります。

現代の音楽は、混乱した意識状態や性欲、寂しさなどを表現したものが多くなっています。まさに三悪趣ですね。世界中の音楽を高い世界の音楽と入れ替えることができたなら、人々の心は変わり、地球は進化した惑星になるでしょう。

コンサート会場がそのまま供養の空間に

さて、今アレフでは、このアストラル音楽のコンサートを各道場で行なっています。コンサートに来られた信徒さんは、「やっぱり生演奏はＣＤと違ってい

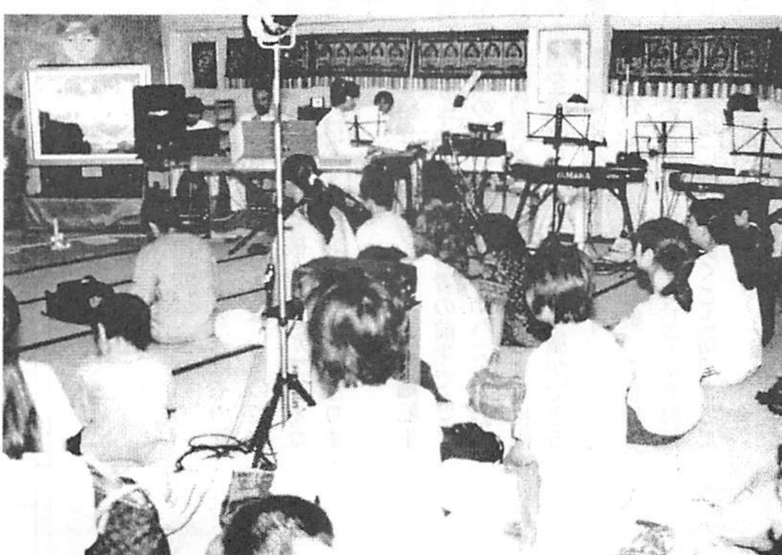
いですね」とおっしゃり、神秘体験をする方もたくさんいらっしゃいます。これは、生演奏の場合、ただCDをかけるのとは違って「音楽の供養」になりますから、神々が喜んで祝福を与えてくださり、その場が特別な空間になるからではないかとわたしは感じています。

まだコンサートを体験したことのないあなたも、ぜひこの神々の祝福の世界を感じてみませんか？

今後も、このコーナーでは、アストラル音楽にまつわる様々なエピソードや、音楽が心身に与える影響など、興味深い話題をご紹介していきたいと思います。

では、また来月お会いしましょう。





烏山で開催された音楽コンサート



第六回

ヴィサイハ輪廻転生談
（ヴィサイハ・ジャータカ）

だれでも修行の途上においては、いろいろと壁にぶつかるものです。普通はその壁をなかなか破ることができないものですが、もしその壁を打ち破ることができるなら、その後は必ず大発展することになります。

今回ご紹介する「ヴィサイハ輪廻転生談」は、サキャ神賢真理勝者の前生である、全智を求める修行者ヴィサイハ（全力）が、有能神の妨害という試練を乗り越えて極限の布施を達成し、より大きな布施ができる環境を獲得するというお話です。

皆さんも、自己の壁を打ち破って布施を行ない、より裕福な環境、そしてより修行しやすい環境に、身を置くことができるようになりましょう。

（※初出『マハーヤーナ』No.41）

これは、覚者がジェータ林にとどまっておられたときに、アナータピンディカ（貧しい人に施し物を与える人）に関して講演なさったものです。骨子は、前に『アセンヤクノキ炭火輪廻転生談』の中で、まさに詳しく述べられました。

さて、ここに覚者は、アナータピンディカに呼び掛けられました。

「後援者よ、大昔からの賢者たちは、『布施を施すな』と、空間の中にとどまって妨害している、愛欲神の王である有能神を寄せ付けずに、まさに布施を施したのである」

このように言って、彼に懇願されたので、物語をお話しになったのです。

その昔、バーラーナシー（剣の城壁）で、ブラフマダッタ（神聖賦与）が君臨していたころ、到達真智運命魂は、八億の財力があるヴィサイハ（全力）という名前の裕福な商人であり、五つの戒を具足し、布施の気質があり、布施に楽しみを見いだしていました。

彼は、市の四つの門、市の真ん中、居所の門と、六つの場所に布施堂を造らせて、布施を行ない、毎日毎日、六十万が出ていきました。到達真智運命魂と布施を欲する者たちの食事は、まさに全く同じでした。

かのバラリンゴの大陸の鋤を休めて、布施を施していると、布施の威神力によって、有能神の世界が揺れ動きました。一種の装飾用の石でできた石の玉座が、愛欲神の王に熱さの状態を実感させたのです。有能神は、

「わたしの地位を失墜させようとしているのは、いったいだれだ？」

と推論し、裕福な大商人を見たのです。

「このヴィサイハは、極端に手を広げ、バラリンゴの

大陸すべての鋤を休めて、布施を施している。おそらく、この布施によって、わたしを失墜させ、自ら有能神になるだろう。彼の財産を滅ぼして、この人を貧しくし、布施を施すことがないように、同様にわたしはしよう」

このように思念して、すべての財産と穀物・ゴマ油・蜂蜜・砂糖など、さらには奴隷・召使い・下男までも消滅させてしまいました。

布施の管理者たちが来て、こう告げました。

「ご主人さま、布施の会館が隠されてしまいました。それぞれ設置されていた場所には、何も見当たりません」

「ここから費用を持っていきなさい。布施を中断してはなりません」

と、夫人を呼びにやり、

「親愛なる妻よ、布施を続けなさい」

と言いました。彼女は家のすべてを吟味しましたが、半分の小銭さえ、同様に見つからずに言いました。

「あなた、わたしたちの正装した衣服を除いて、他の何も見当たりません。家のすべてが空っぽです」

七宝を納めた内部の部屋のドアを開かせても、何も見つかりません。裕福な商人と夫人とを除いて、他の奴隷と召使いたちも見えなかったのです。

再び、偉大な生命体は、夫人に呼び掛けて言いました。

「親愛なる妻よ、布施を中断することはできない。居所すべてを吟味して、何か捜しなさい。」

その刹那、一人のわらを刈る者が、鎌それのみならずそして天秤棒、それのみならずそしてわらを縛るロープとを、門の中に捨てて立ち去りました。裕福な商人の夫人は、それを見て、

「あなた、これを除いて、他のものは見当たりません」

と、持ってきて与えました。



「親愛なる妻よ、わたしは以前、こんなに長い間、全くわらを刈ったことがなかった。しかし、今日はわらを刈り、持ってきて売り、それによってふさわしい布施を施そう」

と、偉大な生命体は、布施を中断することの恐怖から、鎌それのみならずそして天秤棒、それのみならずそしてロープとを持って市を出、草地に行き、わらを刈りました。

「一束はわたしたちのものにしよう。一束で布施を施そう」

と、二束のわらの束を縛り、天秤棒に掛けて持っていき、市の門で売り、小銭を受け取って、分け前の一部を布施を欲する者たちに施したのです。

数多くの布施を欲する者がいて、

「わたしにも施してください。わたしにも施してください」

と、彼らが話し掛けるので、残りの分け前を同様に

施し、その日は夫人と一緒に食物を取れない経験を味わいました。このようにして、六日が過ぎたのです。

それで七日目、この人がわらを持っていこうとしていると、七日間食物を取らず、元来虚弱だったため、額に太陽の熱が当たっただけで、目がくらんでしまいました。彼は意識を固定することができず、わらをまき散らして倒れてしまったのです。

有能神は、その行動を推論しながら吟味しました。その刹那、彼は来て、空間の中にとどまり、第一の詩句を言いました。

「ヴィサイハよ、過去において、
お前は種々の布施を施した。
そして施すことによって、
お前には破壊の法則が生じた。
今後、もしお前が自制して、
布施を施さないならば、
種々の富はとどまるであろう」

偉大な生命体は、その発言を聞いて言いました。

「あなたはだれですか」

「わたしは有能神である」

「有能神は、まさしく自ら布施を施し、戒を守り、戒誓行の行為を行ない、七つの宗教的義務の項目(※1)を満たして、有能神の位に達しました。しかし、あなたは自分自身の支配のもとである布施を妨害しています。本当に、邪なることをなさるものです」

と、到達真智運命魂は言って、三つの詩句を唱えました。

「千の眼ある者よ、聖人によって、
邪なることは、
大変貧しくても、



なされるべきでないといいます。
人々の王よ、
富を原因として、
わたしたちが信を離れるなら、
まさに財産があってはなりません。

一台の二輪車が何度も進む所に、
別の二輪車が進みます。
ヴァーサヴァ（完全な住居）よ、
葬られた昔の繁栄がまさに繁栄しました。

あるという条件では施しましょう。
ないのに何を施しましょうか。
このように、同一に生物たちが施しましょう。
布施に怠惰になってはなりません」

有能神は、それを遮ることができずに尋ねました。

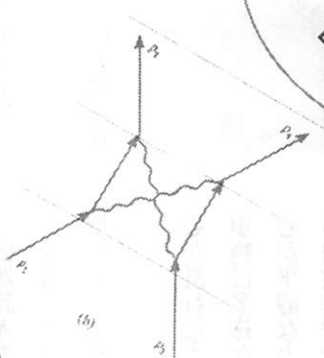
「何のために布施を施すんだ？」
「有能神の位も神聖天の位も欲していず、全智を欲しております。したがって、わたしは施すのです」
　有能神はその発言を聞いて喜び、手で背中に触れました。到達真智運命魂は、その刹那、まさにちょうど食べたかのように、まさに肉体すべてが完全になりました。
　さて、有能神の威神力によって、この人のすべての財産の領域は、まさに元通りになりました。
「裕福な大商人よ、これからは、あなたは毎日毎日百二十万を解放して、布施を施しなさい」
と、有能神はその家の財産に無量の財産を作り、彼を引き取らせて、まさに自分自身の場所へ行きました。
　覚者はこの教えをもたらした後、輪廻転生談に当てはめられたのです。

「そのときの裕福な商人の夫人は、ラーフラ（絡み付くもの）の母であり、ヴィサイハは、まさにわたしなのである」

※1　七つの宗教的義務の項目：次に挙げる七つの善行のこと。
一生涯、父母を養わなければならない。
一生涯、一族の徳の高い者に敬意を払わなければならない。
一生涯、穏やかな言葉を語らなければならない。
一生涯、両舌をなしてはならない。
一生涯、物惜しみの垢を離れた心によって、家で生活し、気前よく放棄し、けちけちせず手放すことを楽しみ、供養に応じ、布施を分け与えることを楽しまなければならない。
一生涯、真理を語らなければならない。
一生涯、憤激してはならない。もし憤激したならば、速やかに抑えなければならない（『有能神相応』より

シンクロする真理と科学 4

今回は、東洋思想の基本理念である宇宙との合一（究極のリアリティの実感）と、素粒子の振る舞いから導き出される宇宙の非局所性・一体性とが、見事にシンクロしている様子を見ていきます。





素粒子の驚くべき性質〔3〕
──「究極のリアリティ」と「宇宙の一体性」

◆究極のリアリティを説く東洋思想

仏教に限らず、あらゆる東洋の世界観の本質は、すべてのものは一体で相互に関連しているという〝相互関連性・根本的合一性〟にあると言えます。

つまり、あらゆる物事を、宇宙全体の中の相互に関連し合った、分かつことのできない「部分」として受け止め、同じ究極的リアリティが別な形を取って現われ出たものであると見なすのです。

わたしたちは、五感でとらえた世界を個々別々の事象に分割し、意味付けし、理解しています。しかし仏教的見地から言うなら、それらすべては、わたしたちの識別作用が無智を背景として生み出した幻影にすぎません。



つまり、わたしたちは五感と意識を通して対象を認識するわけですが、その認識そのものがすなわち、真理の教えでいう「けがれ」なのです。

仏教詩人であるアシュヴァゴーシャは、このことを次のように表現しています。

心が乱れたとき、
事物は多様なものとしてあらわれ、
心が平静なときには、
事物はその多様性を失う。

そして、この究極不可分のリアリティに到達する、あるいはそれを悟ることが、東洋思想の神髄と言えるのです。

◆一切の存在は不可分——非局所性

では、物理の最先端である量子の世界で、このような相互関連性・根本的合一性を持つ、究極的なリアリティの存在を感じさせる出来事が起こっているのでしょうか。

実はそのことが、いくつかの実験結果に認めることができるのです。ここでは、それを追っていくことにしましょう。

観測者と観測対象の不離一体

まず最初に挙げられるのは、前回このコーナーで取り上げたように、観測者の存在が素粒子の物理現象に深く関与しているということです。

このことについて、物理学者フリッチョフ・カプラはその著書『タオ自然学』の中で次のように述べています。

> 原子物理学の観測過程を注意深く分析すると、素粒子を独立した実在として考えるのは無意味で、実験の準備と測定の相互関連としてしか理解できないことがわかる。
>
> つまり、量子論は、宇宙の基本的な合一性を明らかにした。世界は独立して存在する最小単位に分割することはできない。物質の内部をどんなに探っていっても、「基本的構成要素」は見つからず、全体の中の部分がたがいに関連しあう複雑な織物としてあらわれてくる。そして、観測者は必ずその中に含まれてしまう。観測過程の鎖の最後の環なのだ。
>
> そのために、対象となる原子の特性は、観測者と対象との相互作用を考慮しなければ理解できない。つまり、自然の客観的記述という古典的な理想はもはや意味をなさないのである。
>
> 原子を扱う場合には、デカルトのように、わたしと世界、観測者と観測対象を分離して考えてはならない。原子物理学では、観測者自身について語らずには、自然を語れないのである。

素粒子間の不可思議な連携（1）——EPRパラドックス

素粒子間においても相互作用があることが、ある実験から明らかになりました。

素粒子にはスピンと呼ばれる物理量があり、スピンは、ある方向（例

えばX軸)に沿って観測すると、上向きか下向きか、いずれかの状態を取ります。今、最初の状態においてスピンの和がゼロであった一対の粒子が、互いに反対方向に運動し始めたとしましょう。※もしこの二つの粒子の関係に対して、他から何の影響も及ぼされないとするなら、この二つの粒子がどれほど離れても(たとえ何光年離れても)、スピンの和はゼロになります。

　このとき、もし片方の粒子のスピンをX軸に沿って観測し、その結果が上向きだったとすると、その瞬間、もう一方の粒子のスピンはX軸に沿って下向きであると決まってしまいます。他の方向に沿って観測しても同じことです。

　どのような方向に沿ってスピンを観測するかはあらかじめわかっていなかったのに、この結果は、あたかも、一方の粒子を観測した瞬間にその結果がもう一方の粒子に伝わってしまっている、ということを意味するように見えるわけです。

　しかし、相対性理論によって、光の速度よりも速く情報が伝わることはないとされていますので、ここに大きな矛盾が生じます。

　このパラドックスは、アインシュタイン・ポドルスキー・ローゼンの三人が提唱しましたので、それぞれの頭文字を取って「EPRパラドックス」と呼ばれています。

　この正否は、一九八二年に、アラン・アスペが光の偏向を用いた実験を行なうことで検証されました。結果は、どんなに距離が離れていようとも、二つの粒子は通じ合っていることを示したのです。

素粒子間の不思議な連携(2)
――エネルギーの伝播

　先程のEPRパラドックスの実験においては、もともとは一つであったものが分裂して二つの粒子になった場合に、それぞれの粒子

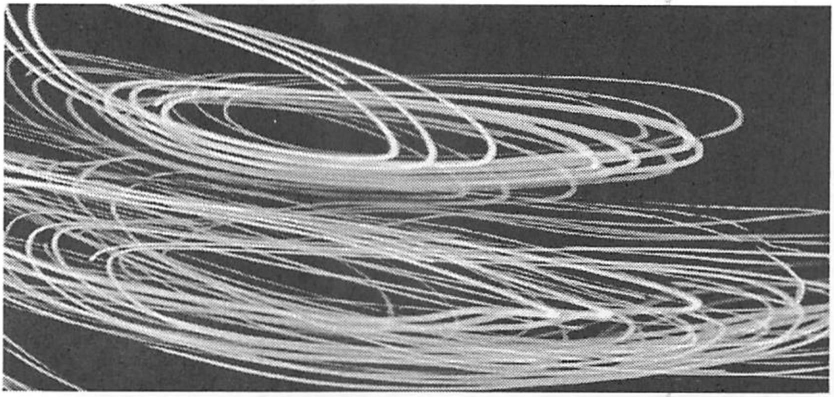
※不安定な原子の一つにポジトロニウム原子があるが、これは一個の電子と一個の陽電子(=プラスの電気を帯びた電子のこと)でできている。そしてこのポジトロニウム原子は、最終的には二個の「光子」に自然崩壊して、それぞれ反対の方向に移動していく。この二個の光子間に、EPRパラドックスの一例が見られるのだ。

間に相関関係があることが証明されました。しかし、実はその後、この不可分な相関関係は、互いに何の関連性もない粒子間においても成り立つことがわかったのです。

一九九五年、ドイツのゲッティンゲン大学の物理学者ゲルハルト・ヘーゲルフェルトは、片方の原子が「励起」状態（訳注・原子や分子の電子が、最も安定な状態よりも高いエネルギー状態にあること）にある二つの原子の相互作用について、イタリア生まれの原子物理学者エンリコ・フェルミが一九三二年に行なった計算を検討しなおしているうちに、この事実を発見した。

フェルミは、一つの原子が「励起」状態から「基底」状態に降りるとき、もう一方の原子にどう影響するかを調べようとしていた。

一般に、ある原子が励起状態時の余分なエネルギーを放射すると、そのエネル



ギーに相当する分だけ別の原子を励起させることがわかっている。……

当然ながらフェルミは、放射エネルギーが最初の原子から二番目の原子に到達するのにかかる時間だけ、その影響が遅れて現われるものと仮定していた。しかしヘーゲルフェルトが計算しなおしてみると、第一の原子が基底状態に戻ったまさにその瞬間に、第二の原子が励起されていたのだ。ある原子の電子がエネルギー水準を一定量下げると、第二の原子の電子は同じ量だけ同時に水準を上げていた。……

この二つの原子は相関しているのであり、このことは、EPR実験で元は同一の電子が分離後にも相関しあっているのとよく似ている。もしそうだとすれば、量子の世界の住人はそもそも定常的に、かつほとんど同時に互いに関連しあっているのだろうか？

（アーヴィン・ラズロー著／野中浩一訳『創造する真空（コスモス）――最先端物理学が明かす〈第五の場〉』）

素粒子の基本的な実在には、超伝導や超流動体などに示されるように、ほかにも謎めいた相関があります。この種の相関にも、今まで述べたものと同じように、「同時に起こる」ということと、「粒子間に、力の存在や媒体の存在が認められない」という大きな特徴があるのです。

これらのことは、宇宙が非局所的であることを意味しています。「非局所的」とは、一つ一つの物が分断されて（他と無関係に）存在しているのではなく、すべてのものが、時空を超えて互いに連携し

宇宙の一体性を証明したフーコーの振り子実験

これは量子物理学が発達するずっと以前の話ですが、一八五一年に、フランス人物理学者レオン・フーコーがある実験を行ないました。当時は地球の自転すら実証されていなかった時代でしたが、その実験の結果は、衝撃的な内容を含むものとなったのです。

少し長くなりますが、『岩波講座 宗教と科学「宗教と科学」基礎文献 外国編・3神と科学』からその部分を引用してみましょう。

イゴール・ボグダノフ（以下I・B）「…（略）…ここでは一八五一年フランス人物理学者レオン・フーコーによってなされたとっぴな実験を思いだせば充分でしょう。…（略）…フーコーはパンテオンのドームの下にとめられた長い綱に、非常に重い石を吊しました。こうして実験者フーコーは四月のある朝、たいへん大きな振り子を始動させたのです。ところがそこで、大きな謎がはじまりました。驚いたことにフーコーは振り子の振動面が——つまり往復の方向——が一定でないことに気づいた。それは垂直の軸にたいして回転するのです。最初は東西の方向に振動していた振り子は、数時間後には南北の方向に動いている。これはどういうわけだ？ フーコーの答えは簡単でした。この方向の変化は錯覚にすぎない。考えてみれば回っているのは地球であるのにたいし、振り子の振動面は厳密に一定だ、としたのです。」

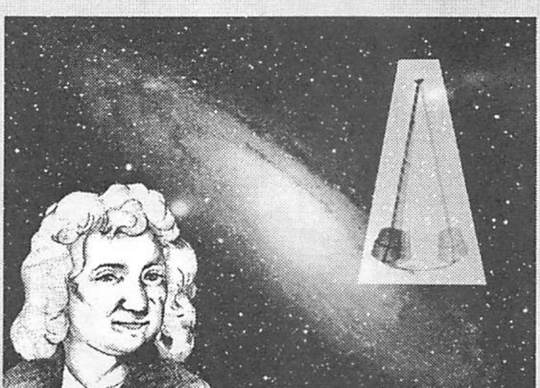
J・G（※ジャン・ギトン）「なるほ

ど。しかし、何にたいして一定、です？宇宙ではすべてが運動している以上、どこに不動な一点をみつけるのです？地球は太陽の周囲を回り、太陽もまた銀河の中心の辺りを動いている……この幻想的なバレエはどこで終わるのです？」

Ｉ・Ｂ「それこそが、フーコーの振り子によって示された真の問題です。なぜなら銀河は周囲の銀河の局部星団の中心に向かって動いており、さらにこれらの銀河そのものが、より一層宏大な局部星団にひきずられています。しかもこの巨大な総体自体がきわめて遠く離れた膨大な銀河の複合体、いわゆる〈グレート・アトレラクター〉に向かっているのです。

そこでフーコーの実験から得られる結論は実に衝撃的です。振り子の振動面は太陽や近い星雲の質量とは関係なく——もちろんそれはかなりの星ですが——地球からは想像もできない遠方の、つまり宇宙の果ての天体に合うものなのです。観測し得る宇宙の質量の総体が無数の遠い銀河のなかにあるかぎり、それは振り子の動きが地球の近くの天体だけでなく「全体としての」宇宙によって決定されることを意味します。

いいかえれば、私がテーブルの上の、この平凡なコップをもちあげるとき、私は宇宙全体に働く力を動かしているのです。私たちの小さな惑星で起こるすべては、各部分がそれ自体で宇宙の全体性を担っているように宇宙のひろがりと関連しています。フーコーの振り子によって私たちは宇宙のすべての原子間に働く神秘的な相互作用があることを認めざるを得なくなったのです。この相互作用はいかなるエネルギーや力の交換も行わず、しかも宇宙をある全体性として結び付けるのです。」



素粒子の振る舞いを扱う最先端物理学の実験だけに限らず、レオン・フーコーが行なった原始的な実験においても、宇宙の一体性が示唆されているのです。

合って（というよりも、本質的には溶け合って）存在しているということです。つまり、ある場所で起きた変化が即全体に影響を与えるといった、総合的なネットワークで結ばれているのです。

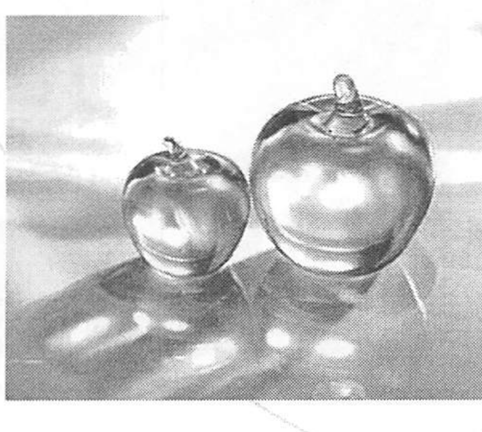
◆「宇宙の一体性」は真我に通じる

わたしたちが修行において到達すべき真我には、実体がないといわれています。この「実体がない」とは、「すべてを経験できるもの、すべてに広がるもの」ということです。それはこの地球よりもずっと大きく、宇宙よりもずっと大きく、すべてを包含したもの、これが真我でありニルヴァーナなのです。

この〝本当の自分〟である真我がそのような状態にあるにもかかわらず、わたしたちは、今現在、「この五蘊を〝自分〟、それ以外を〝他〟として、区別して認識しています。

しかし、例えばこの肉体は、突き詰めれば素粒子の集まりであり、外側の世界も素粒子の集まりでできています。そしてその素粒子レベルでは、自他の区別がないほどに直接的・即時的に関連し合っているのです。

今まで見てきたような素粒子の振る舞いを考えると、そういった自分と外界、自分と他人を区別する見方こそが「謬見解」であって、自他すべてを含めた大宇宙全体が一体であることを、強く示唆していることがおわかりいただけるはずです。



そしてこの考え方は、「本当の自分」である真我に到達する上で、大きなヒントをわたしたちに与えてくれるのではないでしょうか。

導いた喜び・導かれた喜び

michibiki

3

水戸　田所茂男さん・和江さんご夫妻（仮名）



導いた功徳が真理との強い絆となって

このコーナーでは、毎回、真理の流れに導いた人・導かれた人のペアにご登場いただき、導きの素晴らしさ、真理の素晴らしさについてお聞きします。

今回は、真理の実践の大切さを実感され、水戸道場で熱心にご修行に励んでいらっしゃる田所さんご夫妻にお話を伺いました。

この透明さは、普通の人とは違う

「導いた人とのつながりによって、持ちつ持たれつというか、カルマの理論通り、導きを行なったから、今自分はここにいられるのかなっていう気がしますね」と話す田所茂男さんは、現在三十四歳。一歳年下の奥さんと二人のいとこを真理に導いていらっしゃいます。

「わたしは、小さいころから『自分は何でもできる』『自分にはスーパーマンになる力があるはずだ』と思っていました。ところが、ある時期から自分の思うように現象が動かなくなってきて、その葛藤から〝自分自身を開発する〟ことに興味を持つようになりました。

初めはボクシングに打ち込んだり、宗教にも入ったりしましたが、結局はまじめに仕事をしながら人を喜ばせることで満足しようと思って、ボクシングも宗教もやめ、結婚しました。当時は、それが自分の道なのかなって思ったんです」

茂男さんが知人からアレフ（当時：オウム真理教）を紹介されたのは、九三年の暮れのことでした。「もう宗教はいいよ」と断ってはみたものの、「取りあえずビデオだけでも」と勧められて道場へ。応対したのはヴァーラナ師でした。

面談中、師の心の輝きと透明さに触れ、「この人は普通の人とは違う。この人を信用して、ビデオだけは見てみよう」と、それまでの重い心が一変してしまったそうです。

もともと宗教や精神世界に興味があった茂男さんは、アレフの教えに触れるうちに、次第にその素晴らしさに気付いていったのでした。

「自分が以前やっていた宗教には、徳の理論とか、カルマの法則とかがなかったんです。今考えると怖いですし、ぞっとしますね。そこでは、ただでさえ少ない功徳をさらにすり減らし



ていくだけですから。ところがアレフにはその教えがある、そこに惹かれましたね。それで没入しちゃったんですね、『これだ！』って感じで」

ご自身で真理を実践して確信を得た茂男さんは、奥さんにも真理の実践をと思っていました。しかし、奥さんの方は宗教には興味がなく、初めは反対されていました。しかし、茂男さんは、自分がいいと思った本や興味を持ちそうな本を奥さんに渡しては仕事に行く、ということを繰り返したのです。それが当時の茂男さんにできる、精一杯の実践だったのかもしれません。

その心が通じたのか、出産、そしてその後の子育てに追われて余裕のなかった和江さんも、少しずつ茂男さんのやっていることに興味を示し始めたのです。

和江さんは、茂男さんから手渡された本を読んで、自分が思っていたのとは全く違い、内容も反対するほどのものではないと感じたそうです。

決め手は「体験」

茂男さんは、奥さんの様子を見ていて「そろそろいいかな」と感じ、和江さんを道場に連れていきました。そのときはまだ気の進まない和江さんでしたが、その日が自分の人生にとって大きな転機となろうとは、思いもしなかったといいます。

たまたまその日にはイニシエーションが予定されており、師の方の強い勧めで、和江さんはいきなりイニシエーションを受けることに……。そして、そこで和江さんの心はガラリと変化したのです。

「何だかんだいろいろ聞くよりも、百聞は一見にしかずだから取り合えずは経験してみたらということで、いきなりでしたけれど受けさせていただいたんです。『ウマー・パールヴァティーの愛』という曲がすごく印象的でした。何とも言えない、包み込まれるような感じで慈愛が感じられました。その後は、早速ビデオ教学に励むようになりました」

神々から与えられた祝福の試練

奥さんを導き、二人して喜びに包まれたのもつかの間、今度は田所さんご夫妻に試練が訪れることになりました。一連の事件の影響で、教団に次々と微罪による強制捜査が入り、田所さん夫妻のところにも捜査がやってきたのです（実際は全く身に覚えのない嫌疑でしたので、そ

れ以上のことはありませんでした)。

「今は、このときのカルマ落としで、一つの壁を乗り越えたかなって思います。あのころはまだ心が弱かったから動揺したんだと思います。その後も続々といろんな現象が起こりましたが、もう、アレフだけを頼りに乗り切ってきたという感じです」と、はにかみながら当時を振り返る茂男さん。

修行の途上においては、だれしも、集中的に苦しみを経験する時期があります。これは、修行することによって心の光が強まり、それまで内側に隠されていた悪業が照らし出されるからです。

苦しみの現象化は、一般的には忌み嫌われることですが、修行者にとっては〃神々からの祝福〃であり、大きな喜びにほかなりません。なぜなら、未来において味わわなければならない大きな悪業(苦しみ)を、早く、しかも最小限の経験で消滅させてしまうことができるからです。そしてその後は功徳優位になり、幸福な人生、あるいは幸福な来世が約束されるわけです。

田所さんご夫妻も、この教えを胸に刻みながら、神々から与えられた祝福の試練を耐え抜かれたのでした。

徳を積み、真理を実践する喜び

ともすれば信さえ揺らぎそうになる中、茂男さんがこの窮地を乗り切ることができたのは、教えに対する理解とともに、導きの功徳があったからだと言います。

「そのころ、わたしが導いた人がイニシエーションでいい経験をして、信がどんどん深まっていたんです。わたしの方は相反してけがれが出て揺れていたんですけど、『行かない』って思っても、どうしても行かなければならない状況になったりと

か。結局、導いた功徳によって自分も強く引っ張られるんでしょうね」

一方、和江さんの方は、様々なカルマ落としが起こっても、それでも真理から離れるということは全く思わなかったどころか、逆に、「絶対に続けなければ」と思っていたそうです。その背景には、師やサマナを見ていて、「こういう清らかな人になりたい」という思いがあったからだといいます。そうした和江さんの思いも、茂男さんを真理につなぎ留めた一つの要因なのでしょう。

「それ以来、コツコツと自分なりにお布施等をさせていただくうちに、修行が一番良くなって、心の解放を得られるようになってきて、今に至るっていう感じです。

あのとき、あのカルマの解放があったから、今があるのかなって思いますね。修行して信が持てるようになったら、心もほとんど動揺しなくなりました。それは、功徳とか修行の果報なのかなという気がします。

わたしが導いたいとこの二人も、いろいろ話をしてみると、『やっぱり修行しかないんだよ』ということがわかっていて、自分なりにコツコツとやっているんですね。いとこはすぐ近くに住んでいるんですけど、これはもう、前生からの約束で一緒に真理を実践しているんだなと思うし、修行をやれば意識はつながっているんだっていう感覚があります」

熱っぽく語る茂男さんからは、真理を実践し続けてきたという喜びが伝わってきました。

カルマ落としを経験し、大変な思いをされた田所さんご夫妻でしたが、導きの縁による絶妙なチームプレーによって見事にそれを乗り越え、それぞれが真理を実践できる喜びをかみしめていらっしゃるようでした。



カルマの法則、徳の理論――。これらの教えを背景に魂の真の解放を得る道、それは、いにしえの聖者方の教えを受け継ぐアレフにしか存在しません。そのことを悟られた田所さんご夫妻は、真理に出合えたことを心から喜び、現在もコツコツと修行に励まれています。

皆さんも、今生生じたこの崇高な真理との縁を大切にし、ぜひ魂の浄化に励んでいただきたいと思います。

LOOK BACK ALEPH

船橋（9月9日）
大阪（9月23日）
名古屋（9月24日）
横浜（9月29日）
東京・烏山（9月30日）
東京（10月14日）

宗教・社会・未来について明快に語る

マイトレーヤ元正大師説法の旅

八月中旬から九月初旬にかけて、関西・関東の各道場で大きな反響を呼んだ「マイトレーヤ元正大師説法会」――。

その後も、九月中に船橋・大阪・名古屋・横浜・東京の五カ所、および十月十四日にも東京で大々的に行なわれ、どの会場も大勢の参加者で埋め尽くされました。なお、大阪・名古屋・横浜・東京は二巡目になります。

今回の説法では、真我の状態とその歓喜、世界情勢



に対する分析のほか、今後の教団の流れについて、占星学的な予測などを交えながら明快に述べられました。

九月十一日に発生したアメリカ同時多発テロの影響もあって、今後の日本や世界の動向に対する関心が高まっているのか、説法会に参加した信徒の皆さんは、マイトレーヤ元正大師の提示される資料や論理的な解釈に、真剣に耳を傾けていました。

いずれも、精神的時代の到来を強く予感させる説法会となりました。

説法

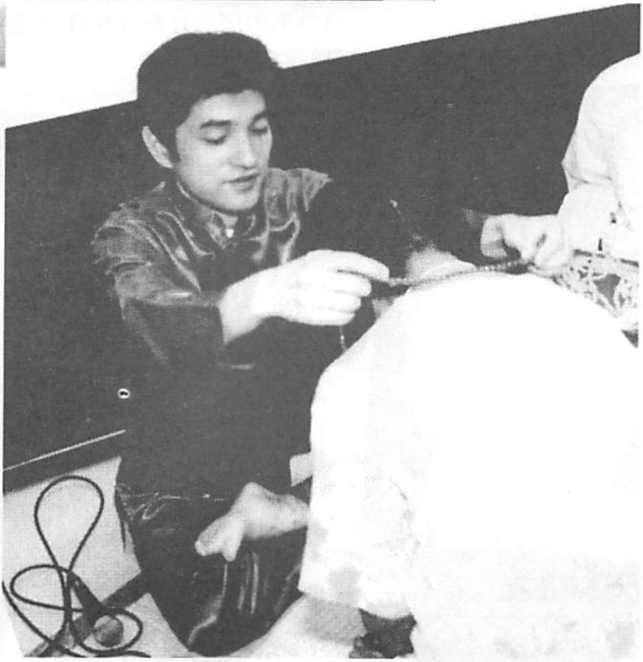
●写真（上）——今回の説法会では、初めて説き明かされる法則もあり、皆、真剣に耳を傾けていた（9月30日東京・烏山にて）



●説法の前に、道場のさらなる発展を祈って
（９月 24 日名古屋道場にて）

法具の伝授





●写真（上）――特製の法具を伝授
（9月9日船橋道場にて）

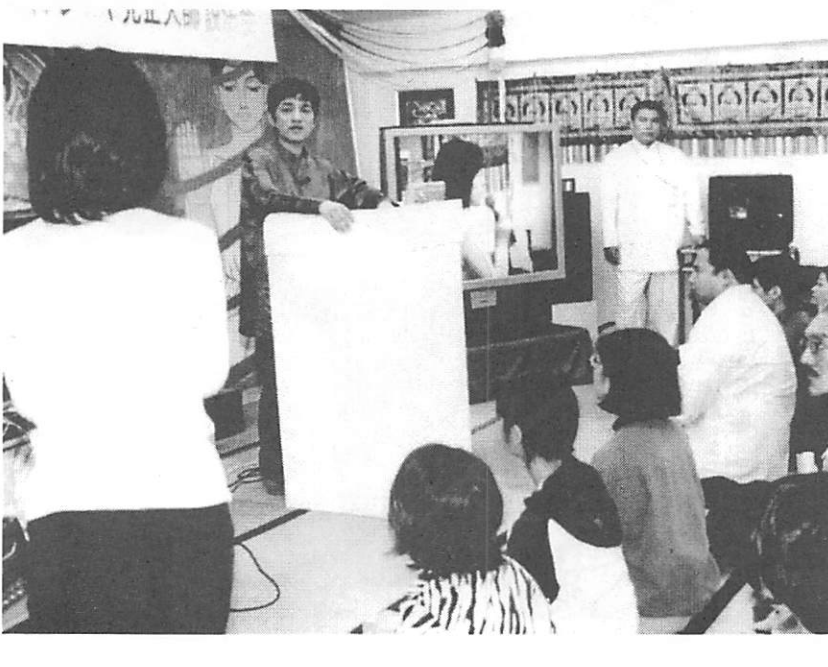
●写真（右）――修行の成果を称えて数珠を伝授
（9月29日横浜道場にて）

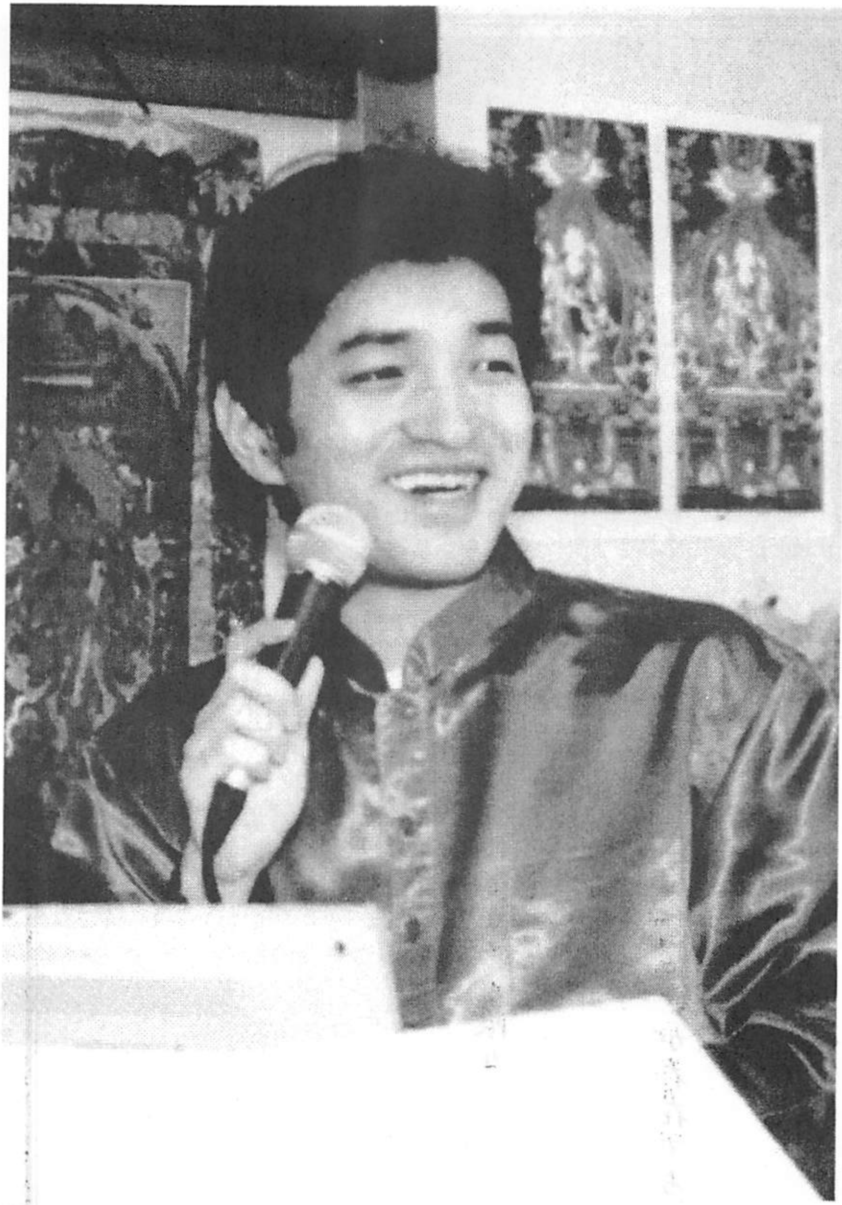
質疑応答



●修行上の的確なアドバイスを与える
（9月9日船橋道場にて）

●元正大師のご回答は、会場にいる皆にも役に立つものばかりだ（9月30日東京・烏山にて）





●一人ひとりを暖かい波動で受け入れる
（9月29日横浜道場にて）



「聖者の言葉」

自己を認識するという働きがある限り
他者も同時に想定される
「自己」があることによって「他」が存在する
このように「自己」と「他」を



別のものとしてとらえる働きによって
自己の側には執着が、
他者に対しては邪悪心が生じるのである

ダルマキールティ（※）

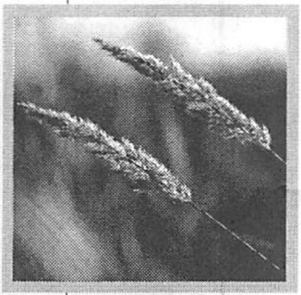
※ダルマキールティ：(Dharmakirti) 七世紀インドの偉大な仏教論理学者

編集後記

10月半ばごろ、「進化」編集部は、チッタカ正悟師を特集するに当たって正悟師に写真撮影をお願いしました。そのときのことです。

屋内外での撮影は２時間以上にも及び、その間、立っていただいたり、座っていただいたり、手印を組んでいただいたり、はたまたその場で深い意識に入っていただいたりと、いろいろお手間を取らせてしまったのです。

それでも、正悟師は一切嫌な顔をされず、一つ一つ、快くこちらの申し出通りにポーズをとってくださいました。



しかし、これは実際大変なことだと思います。例えば、立位礼拝で蓮華印を組んで頭上に上げるポーズだけをとっても、十数分の間、じっと動かずに静止していただくわけです。しかも、そばにいるわたしたち取材陣のカルマを受けながらですから……（写真撮影は、特に被写体に意識を集中させますので、カルマ交換が激しいのです)。しかし、正悟師は、そのポーズが終わると「これはエネルギーが上がっていいね」と、ニコニコされながらおっしゃったのです。

昼下がりの秋空を背景に行なわれた写真撮影は、正悟師の暖かいお心の一端に触れることができ、わたしたち取材陣にとっても心に残るものとなりました。

《お詫びと訂正》
「進化」10月号のＰ27、6行目にある『天輪獅子吼経』は、『転輪獅子吼経』の誤りでした。お詫びとともに、ここに訂正させていただきます。

進化　VOL.14

2001年11月　初版第1刷 発行
宗教団体・アレフ